サウジアラビア便り

Arabian Days and Nights

第一部

夏目椰子

まえがきにかえて

二〇〇六年七月一二日、私は初めてサウジアラビアの地を踏んだ。前日の深夜一二時に関西空港を飛び立ち、ドバイ空港に着いたのは早朝五時（現地時間）。カラフルな民族衣装を身に纏ったアフリカ系、インド系そしてアラビア系の人びとがにぎやかに行き交う光景に圧倒されながら乗り換え便を待った。
ドバイからはアラビア湾に浮かぶ小さな島国バーレーンへと飛んだ。バーレーンとサウジアラビアはキング・ファハド・コーズウェイという長い海上橋でつながっており、青い海の上を車は猛スピードで走り抜けた。すれ違うクルマは極端に少なかった。橋の真ん中にある国境を越えれば、サウジ入国である。コーズウェイの終着点はアラビア湾に面したサウジアラビアの都市アルコバール。空港と港のあるダンマン、国営石油会社アラムコ本社のあるダーランなど隣接する三都市でサウジアラビア東部大都市圏を形成している。

最初の二ヵ月間、私はまずアルコバールに滞在した。それはその後二年半にわたって、サウジ西部、紅海沿岸都市ラービグに住む私にとってはウォーミングアップのための場所であり時間であった。
イスラム教の聖地マッカ(メッカ)のある国をおとずれるなど望んだことも考えたこともなかったが、夫の赴任に伴われて二年九ヵ月間、サウジ生活を堪能させてもらった。サウジという国の特異性や会社に所属する夫に帯同している家族としての制約などもあり、日々の暮らしには強烈な閉塞感が付きまとっていた。しかし少なくとも私が滞在していた期間、観光目的で簡単に入国できない国であり、『アラビアン･ナイト』のエキゾチズムはそこここに香り立っていた。希有な経験をしたという意味でやはり私はサウジ生活を堪能したのである。

サウジアラビアのことを書いておきたいと思ったのは、二〇〇九年初夏、帰国してしばらく経ってからだった。サウジ滞在中に日本の友人たちに頻繁にメールを送っていた。中でも「サウジより」と題したメールマガジンは複数の友人知人たちに宛てて送り、第一八号を数えた。ここで書いた内容はその「サウジより」をベースに、あとは個別に友人に宛てたメールを加筆訂正して追加したものである。
また「サウジより」は友人の運営する会社のホームページ上で「サウジ便り」というタイトルで順次掲載され、多くの方が訪れてくださったと聞いた（二〇〇九年に掲載は終了した）。

文中、聖地メッカは「マッカ」に、ジェッダは「ジッダ」に、聖典コーランは「クルアーン」に、預言者マホメットは「ムハンマド」にそれぞれ統一させてもらった。アラビア人の発音に近いし、近ごろの日本語の文章にもそうした発音表記が多いからだ。
また文中に登場する人びとの名まえは、本名の場合もあれば仮名の場合もあり、敢えてことわらないこととした。すべてほんとうの名まえのほうがリアリティがあっていいのだが、念のためプライバシーを考慮した。
ページの最後にある【引用コラム】はすべて後から追加したもので、読んでくださる方に少しでも楽しく理解を深めていただきたいと考えたためである。
最初のころに書いた文章を後で読んでみて明らかな間違いや錯誤には訂正を試みた。

2010.6.28

目次

サウジアラビア便り　第一部　目次

まえがきにかえて

目次

1　熱〜い暑いサウジ生活のはじまり

2　気温五〇度、湿度一〇〇パーセント

3　コンパウンドというところ

4　イカマというもの

5　アバヤとムタワ

6　サッカー「日本・サウジ戦」

7　アラムコという企業

8　ちょっとドバイまで

9　アルコバールからラービグへ

10　ラマダン中のデカダンス

11　私の住んでいるところ

12　はじめての日本人女性

13　国際都市ジッダ

14　デザートキャンプ

15　ハラールとハラーム

16　タブーの魅力

17　ちょっと前までベドウィンだった

サウジアラビア便り　第二部　目次

目次

18　アラビアを見くだすトルコ

19　ハッジとウムラ

20　あふれるメイド・イン・チャイナ

21　歯科治療体験

22　真夜中のパーティ

23　ペスト・コントロール

24　女性の生き方

25　なぜクリスマスツリーを飾るのか

26　出稼ぎ外国人労働者（１）

27　出稼ぎ外国人労働者（２）

28　女性たちの明るい悩み

29　地図にない国、イスラエル

30　ラクダ

31　消えた旅行計画
32　さらばジッダ
33　アザーンを聞きながら
あとがき

１　熱〜い暑いサウジ生活のはじまり

　日本との時差は六時間。ＮＨＫが見られるので朝六時にＴＶをつけると、日本のお昼のニュースをちょうどやっているという具合だ。またこちらの休日は木金。明日は水曜日で、週末というわけだ。
　サウジ人は、夜明け前にお祈りをするので、朝は早いらしい。都会では夜も遅いと聞いているので、いったいどこでつじつまをあわせているのだろうか。
　今の季節は夏。正真正銘の真夏。「気温は五〇度、湿度は一〇〇パーセントだよ」とこちらに来る前にさんざん脅かされていた。覚悟してきたとはいえ、半端じゃなく暑い。公式的には気温四二度とか四三度とか報じられているが、日中日なたの気温は五〇度を越える（気温はもちろん摂氏です）。夕方にはすこし暑さがやわらぐかと思いきや、夕暮れ時に外に出ても相変わらず暑い。むしろ湿度が濃厚になって不快感は増す。

　日本ではきょうは東海地方などで大雨とのことだが、こちらは一年を通してほとんど雨が降らない。で、そこいらじゅう砂だらけ。といっても、私の住んでいるところは、よく管理された外国人居住区なので、木々と芝生に覆われ、小鳥のさえずりも聴こえてくるほど緑豊かな環境ではある。しかしこの居住区（コンパウンドという）を一歩出れば、緑は極端に少ない。街なかには空き地が多い。いや広大なる砂地に建物が贅沢に土地を分け合っているだけだ。砂地が多く見えるから街じゅうが砂だらけに見えるのだろう。

　緑といえば毎日とても気にかかっていることがある。繰り返すけど今は真夏。しかしコンパウンドの中では、風にそよぐ名も知らない大きな木々が、季節はずれの枯葉を散らせ続けている。枯葉が舞えばまもなく寒い北風の季節がやってくる、というのは温帯に住む私たちの常識だけど、ここでは寒さどころか涼しくなる気配さえもない。木々の緑もいっこうに色褪せることもない。なのに休みなく枯葉が降るように舞うこの光景。しゃらしゃら、さらさら、まるで衣擦れのような音がする。

　さて、ここの子供たちはすでに夏休みに入っており、コンパウンドの中で行き交う人もまばらだ。よく歩いているのはネコばかり。みんなすごく人なつこくて足にスリスリしてくる。きっとゴハンがほしいんだなと思うのだが、さてどうしたものか。「ノラ猫にえさだけ与えて飼わないのはよくない」と私は考えていた、日本では。しかし痩せこけたネコと出会うたびに心が痛み、ここでは宗旨変えしてもいいんじゃないかと思いながら心は決まらない。人っ子一人見あたらず、あくまでも青く澄んだ異国の空の下で、切ない気持ちを噛みしめる瞬間だ。
　コンパウンドの掲示板には、「ネコの飼い主募集」とか「うちのネコが行方不明」などの記事が貼ってある。三毛猫風、とらネコ風、いろいろ見るが、みな一様に痩せていて足が長く見えるのは気のせいだろうか。日本の飽食ネコに比べるとひとまわりサイズが小さい。不思議なのは犬が見当たらないことだ。

2006.7.18

２　気温五〇度、湿度一〇〇パーセント

　一日中半端じゃなく暑い。最も暑い日中の時間帯にアスファルト道を歩いたりすると濃く熱い空気が顔にぴったり貼り付いてくる。一〇分もすればじきに頭がクラクラし始める。あちこちで陽炎が立ち昇っているのが見え、まるで陽炎という熱を持った実体物がそこここに蠢いているかのようだ。

　できるだけ日中の外出はしたくないが、そういうわけにもいかず出かけることもしばしばある。私が出かけるときはアバヤという薄手の黒いロングコートをすっぽりと着て指先の出た手袋をして日傘をさすというスタイルである。サウジアラビアでは女性が外出するときにはこのアバヤを着ないといけないそうだ。コンパウンドの敷地内ではアバヤを着なくてもいい決まりである。陽射しを怖れる私はどこへ行くにも太陽からの強烈な陽射しを避けるために日傘･サングラス・長袖・手袋は欠かせないのだが、あまりの暑さのために日傘の中にすら熱気がこもってしまう。だからときどき傘を振って熱を追い出す。持っている傘が飛ばされてしまうほど強く風が吹くこともめずらしくないが、そんなときでも風を心地よいとは感じない。気温が高すぎるからだろう。

　とにかく太陽の下で人間は無力だ。無理をして長いあいだ外にいたら熱中症になる。そういえば、コンパウンドの中で働いているインド人やパキスタン人の労働者たちが木陰で休んでいる姿をよく見かける。朝のうち彼らは水撒きしたり掃除をしたりして働いている。日中の労働時間中は交代で休憩をとるのか、働いている姿より木陰で休んでいる彼らの姿ばかりを目にする。暑いところで働くのはじつに効率が悪そうだ。
　彼らは暗い緑色のつなぎ（作業衣）を着て黒い顔をしているから、鬱蒼とした大木の根元でじっと静かに座っていたりすると景色の中に溶け込んでしまう。ド近眼の私は景色にうまく溶け込んだ彼らの存在に気づかず、近づいて驚くことがよくある。

　ここは海辺の町である。残照を感じる遅い午後、風は止み、その後サーフィンで言うオンショアの風が吹いて海の湿度が運ばれてくる。濃厚な湿度が黄昏とともにやってくるのだ。サウナの中だってこれほど不快ではないだろう。これ以上の湿度はありえないと思う。これが噂の湿度一〇〇パーセントなのだ。週に二、三回、家中の窓ガラスがすべて「結露」する朝がある。それも外側にである。そういうときメガネをかけて外に出てみると瞬時にメガネが曇る。早朝七時ごろすでに気温は三〇度になるが、一日でいちばんさわやかな時間だということがだんだんわかってきた。

　さてじつは私はそこそこ快適な環境に暮らしている。二四時間三六五日エアコンが稼動し続ける家に住んでいるからだ。こんなぜいたくな夏の過ごし方はこれまでしたこともないしこれからもゼッタイしないと思う。サウジ人だってきっとみんながそうした家に住めるわけじゃないと思う。だがぜいたくな暮らしはそれを失なう時のことを考えるとおそろしい。二四時間三六五日フル稼働のエアコンが故障したときのことを私はいつも心配してしまう。そしてこの快適な暮らしには尽きない不安がすり寄ってくるのだ。

　午後のひととき一人で本を読んでいると何者かがいる気配がする。たまに窓の外を庭掃除のインド人（？）が通り過ぎるがそれじゃない。それはホントに微かな物音だ。私は目と耳だけに神経を集中して瞬間的に音の場所をとらえる。するとそこには（たいてい白いペンキの壁に）巨大なヤモリが息を潜めているのだ。私が本を置くあいだに「ヤツ」は二、三歩動き、私が立ち上がると同時に猛烈な勢いで家具の小さな隙間の奥深くに逃げてしまう。どうやら私たちの家にはヤモリが同居しているらしい。それも一匹ではない。おおぜいのヤモリが同じ空気の中で快適に暮らしている。
　あるとき夫が私を呼ぶので大急ぎで駆けつけると大きなヤモリと夫とがじっと対峙している場面だった。びっくりするほど大きな叫び声だったが、ヤモリは大きな音にはさほど反応しないのか壁にじっと貼りついて次の行動を狙っている様子だ。手に棒状のものを持って立っている夫を見て私は思わず叫んだ。
「お願いだからヤモリを叩かないで」

　そう言った手前、なんとしてもヤモリを捕まえなければならない。私は意を決してヤモリの背を手でぎゅっと握りしめ、ドアを開けて暑い外気の中にそっと逃がした。日本ではヤモリは「家守」である。人間にとって益虫ならぬ益類であるから殺してはならぬと思ったのだ。しかし二〇センチを越える大きなヤモリを捕まえて指を噛まれたときは歯がないから痛くも痒くもなかったけれど、おそろしさに冷や汗が出た。それ以降、夫は私をヤモリ捕りの名人と思ったらしくヤモリを見つけるたびに私を大声で呼ぶのである。そしてある夜またしてもヤモリの大捕り物が始まった。
　居間の長ソファの下に一匹の大きなヤモリが逃げ込んだのを目撃した私たちは重いソファを動

かすハメになった。いままで動かしたことのない長ソファをどかしてみて二人は仰天した。なんとそこにはゴキブリの死骸がたくさん転がっていたのだ。ヤモリ発見のための大掃除で発見した多数のゴキブリの死骸。
　ヤモリは体長二、三〇センチもあって異様だが、ゴキブリはごくふつう、日本の黒ゴキブリより少し大きいぐらいである。
〈ヤモリにもゴキブリにもここの暑さはしんどいのかなあ〉
と涼しいわが家に逃げ込んできた彼らをしみじみ思ってしまった。
　でも一つ謎が残ったままだ。一階にある居間兼食堂では毎日のように生きたゴキブリと遭遇する。私が掃除をサボっているからではない。どこからともなく日々やってくるのだ。そして発見するゴキブリはどれも酔っ払ったようによろよろしているのだ。まるでわが家を死に場所と決めてやって来るような感じなのだ（その謎は第二部「ペスト・コントロール」のページ参照）。

2006.7.30

３　コンパウンドというところ

私はコンパウンド compound というところに住んでいる。外国人居留区である。にぎやかな街の中心部から車で二〇分ほどのところにある。
古びた建物が密集し、道路端に空缶や紙屑が散乱する繁華街を離れるとやがて道路の左右には豪奢な邸宅街が現れてくる。家々は高い塀に囲まれてときに塀の外側に花が咲きこぼれていたり、背の高い椰子が空に向かってそびえていたりする。そんなおとぎの国のような邸宅街を抜けて車が急にスピードを落とすとコンパウンドのドライブウェイにはいったことに気づく。

減速ポイント（盛り上がった道路）を二ヵ所ゆっくりと越え、セキュリティポイントで車は停止する。鉄条網を太く巨大にしたようなクルマ止めが目の前に横たわっている。裸足で登ったら痛いだろうなという想像を掻き立てられる代物だ。迷彩色のユニフォームと銃で武装した私兵たちが運転手に話しかけ、舐めるように車内をねめまわす。トランクを開け、車体の下部をスコップのようなミラーで回し見る。高みから機関銃がこちらに向かっているのが見える。セキュリティポイントを抜けると次にコンパウンドの入口までさらに一、二分かかる。ここで再度チェックを受けるのである。
大きな自動扉が開くとこんもりとした木々の緑が迎えてくれる。英国人がここを経営しているらしく英国の街なかにあるタウンハウス風の家々が建ち並んでいる。二軒長屋というとイメージがめちゃくちゃになってしまうが言ってみれば庭付き西洋二軒長屋だ。各戸を仕切る塀はない。戸数、築年数そして居住者数などはまるでわからない。

コンパウンドの中にはさまざまな施設がある。屋外プール、スポーツジム、レストラン、スーパーマーケット、クリーニング店、宝石店などなど。プール、ジムはスポーツ音痴の私に無縁だが、スーパー、クリーニング店にはちょくちょく顔を出す。他に行く場所がないからだ。
ときどきは宝石店をひやかす。買いたいわけでもなく買いたくないわけでもなく、人恋しくて「ハロー」と言いたくて店に入ってしまう。笑顔のうまいインド人店主は私が欲しそうに見つめているアクセサリーを手にとって実に熱心に説明してくれる。買わないと申し訳ないほどの熱心さだ。申し訳ないと思うのだが、きっとまた買わずにのぞいてしまいそうだ。

緑豊かなコンパウンドの中

私はスポーツだけでなく計算にも弱い。人生の計算も苦手ならちょっとした暗算も苦手だ。なので外国ではいつも苦労する。先日もこんなことが…。
コンパウンドの中のスーパーに買物に行った。移動手段は歩きのみ。なので重たいミネラルウォーター、ノンアルコールビール、ジュースを届けてもらうように頼み、軽いものだけ持ち帰った。〈きょうの買物はどうも高すぎる気がするなあ〉と思いながらも家に着いてしまい、ほっと一息ついてからレシートを見た。
「うむ、やっぱり間違ってる！」
その日、レジでは慣れない会話をたくさんしたのでお金を払うときには気が緩んでいたのか、つい日本でのように言われるままに支払ってしまった。慣れない通貨で瞬間的にケタを勘違いすることが私にはある。ふつうの人にはないかもしれないが私にはときどきあるのだ。

外は凄まじく暑い。できることならうやむやにしたいところだったが、気を取り直して再度出向いて行った。デリバリーを頼んだジュースの金額が一ケタ多かったからだ。ところが、レジ係君は間違いじゃないと言う。ジュースは常温保存の一リットル入りの紙パックを四本ほしかったので、四ボックスと言った。彼はそれを一カートン（一二本入り）×四つと計算したのだった。とにかく訂正はしてくれたのだが、家に帰り着いたときは化粧もはがれ落ち、くたくただった。計算力だけでなく英語力にも問題があることを再確認した。

このスーパーの広さはコンビニほどで、スーパーというよりはコンビニあるいは売店といった感じだが、中に小さな自家製パン屋さんがある。ある日、私は、一・二五リアルと一・七五リアルのパンを買った。「三リアルだな」（これぐらいの暗算はできる）と思いながら、袋に貼ってくれた値段シールを見るとなんと四リアル！
中国系のパン屋のおじさん。そのアンパンマンのような丸くて赤い顔をにらむと、待っていたかのように笑いながら手を出してパンの袋を受け取り、三リアルに直したシールを貼って返してくれた。「え～え、気づいちゃったの？」みたいなふざけた雰囲気はほとんど志村けん状態。私は怒るどころか笑いを必死に抑える始末。このおじさんとはいつも「おはよう！」とあいさつする仲なのに…。まったく油断もスキもあったもんじゃない。まあ一リアルはわずか三〇円ほど。こだわる私もけっこうセコイなあ…。

レジでお金を支払うとお釣りの紙幣といっしょにガムをくれることがよくある。最初、意味がわからなかった私は〈あら、サービスかしら〉とか思ってニッコリ笑って受取っていた。もしかしたら「サンキュー」とか言ってうれしそうにしていたかもしれない。しかし理由はすぐに判明した。少額コインが不足しているらしく釣り銭〇・五リアルとか〇・七リアルとかの代わりにガムをくれるのだ。サービスしてくれるわけないよね（はっはっは）。

夕方ときどきはコンパウンドの中のレストランに出かける。大きな薄型テレビが二ヵ所の壁に

掛かっていて、うす暗い照明のファミリーレストランである。隣のコンパウンドまで足を延ばすとこちらより少しマシなレストランがある。りっぱな扉を開くと淡い色のテーブルクロスとナプキンをきちんとセットした四人がけのテーブルが整然と並んでいる。高級そうな雰囲気を感じとってちょっと緊張してみる。でもメニューをながめてみるといたってカジュアルなアメリカンメニューのみだ。運がいいと自家製（密造）のワインを飲ませてくれる。運が悪いときは少ないと思うが、あるときワインを注文すると「ない」という返事が返ってきた。ワイン密造でこのレストランが手入れを受けたとは風の噂で聞いていた。しばらくワインが飲めないと思うと残念至極であったが、半月もするとワインは復活していた。ここのワイン、高くもなくうまくもない。

2006.8.20

【引用コラム】

「カンポンという言葉は、実は英語のコンパウンド compound の語源であるとされる。

　ヨーロッパ人がマラッカやバタヴィア（ジャカルタ）の住宅地を見て、カンポンという現地人の言葉を知り、インドでも同じような居住地をそう呼ぶようになったのだという。そして、大英帝国が植民地とした地域で一般的に用いられるようになる。アフリカでは囲われた集落のことをコンパウンドというのである」

（布野修司「地域の生態系に基づく住居システム」『滋賀県立大学環境科学部年報第１０号』）

４　イカマというもの

　きょう八月最後の土曜日にやっと私のイカマ（居住許可証）を取得することができた。

「うれしーいな。やっと安心できるね。で、私のイカマはどれなの？」
「そんなものはないよ」
「え？」
　夫のイカマ（りっぱな表紙付き）を手渡され開いてページを繰ってみる。なんと夫のＩＤ情報をめくっていくと最後のページに私の写真と一言「家族」とだけ書いてある。
　習い始めたばかりのアラビア語で手探りに読んでみた。生年月日もない。
「この国では、女性は男性の付属物だからね」
ふん、わかってるわよ。わかってるけど、あらためてムカつくね、こういうのって〉
「じゃあ、私はそれをどうやって携帯するわけなの？」
「コピーして、それを持つんだよ」
　以前から噂に聞いていた〈女性はご主人のイカマのコピーを持つらしい〉という意味がやっとわかったのだ。私は、カラーコピーした各ページをきれいに製本して自分用のイカマを作った。

　イカマ取得までの道のりはけっこう長かった。まず夫が就労ビザ、私が家族訪問ビザで入国、滞在し始め、夫のイカマを申請取得、次に私が病院で健康診断書を作りイカマを申請し、やっと取得できたのだ。
「なかなか許可が下りないヒトもいる」
「会社の命令で来てるのに」
「この国には確かなものは何もない」
　ひぇー、この先だいじょうぶなのだろうか。
　この国では何らかのサービスを受ける側は待つのが当然なのだ。待ってるヒトを気遣ったりしない。日本的に手順どおり手続きを行ったからあとは待つだけ、では通じない。待たされる側がもしも速やかな処理を願うなら
「どうか頼むよ。急いでほしいんだ」
と大きなジェスチャーと大声で相手を説得しなければならない。英語が通じるようでいて肝心肝要なところでは通じない。まじめな日本人はストレスを溜めて病気になりかねない。
　しかしあくまでも「家族」であり「家族」でしかない私がそれほど気を揉んだわけじゃない。それに実際に私自身が手続きしたわけでもない。付随物は気楽でいい。

2006.8.26

５　アバヤとムタワ

　アルコバールの街には巨大なアメリカンスタイルのショッピングモールがいくつもある。モールの中には日本でもおなじみのファッションの店がずらりと並ぶ。ザーラ ＺＡＲＡ、エスプリＥＳＰＲＩＴ、ジョルダーノＧＩＯＲＤＡＮＯ、エイチアンドエムＨ＆Ｍ、ゲスＧＵＥＳＳなどの店名が見える。服の価格は日本とほぼ同じぐらいだろう。中国製の衣類が多いのも同じだ。また高級ブランドの店もあるようだが、シャネルやヴィトン、エルメスといったブランドショップをここでは私はまだ見ていない。
　日本で女性が会社に着て行けそうなシンプルでオーソドックスな服などはどこにも売っていない。この国の女性たちはきっとカラフルでゴージャスなデザインの服を好むのだろうか、そういった服が多いような気がする。パーティ用のロングドレスだけを売る店も少なくない。
これだけたくさんパーティ用のドレスを売っているということはそれだけたくさんパーティが開かれているということだ。ではいったいどこでパーティは開かれているのだろうか〉
　またまた謎が沸き起こる。

　さてアバヤだけを売っている「アバヤ屋さん」がたくさんあるのは華やかでサウジらしい光景だ。女性の着る黒衣をアバヤと言う。サウジ人女性は外出時には必ずアバヤを着て、頭には「ヒジャーブ」という大きな黒い布を巻きつけ、顔には別途「ブルクー（ブルカ）」という布を付けたりする。顔の隠し方は、全部を黒布で覆う人もいるが、目だけ出す人が多いようだ。またアバヤがマントのような形に仕立ててあってアバヤをすっぽり頭から被る着方もある。超欧米風の消費生活と町を歩くサウジ女性たちの姿とのギャップを感ぜずにはいられない。 サウジ人でない他のアラブ諸国の女性たちはカラフルなスカーフで髪を隠し顔は出している。

　「アバヤ屋さん」の店内にはアバヤがずらりとぶら下がっている。アバヤは色は黒だけだが、華やかな刺繍や金銀のライン飾りやスパンコールなどで飾りが付いているものが多い。最初は「そんな派手なものは恥ずかしくて着られないわ」とか言っていても見ているうちにだんだん綺麗な飾りの付いたアバヤが欲しくなってくる。私もライン飾りを特注で付けてもらい、頭に巻く黒いヒジャーブと顔を隠すブルクーを揃えた。目だけを出してぜひ街を歩いてみたいものだ。アバヤはこの国での女性のおしゃれの基本なのでアバヤだけを売っていても商売になるのだ。

　ところでアバヤがサウジの女性用ユニフォームならサウジの男性用ユニフォームは「トーブ」という白い長衣である。街なかでよく見かけるのは白い長衣を着て頭には赤白格子模様か白い布をかぶっている男性たちだ。男性が頭にかぶる布を「ゴトラ」あるいは「クーフィーヤ」と呼び、その布を押さえる黒色の輪を「イカール」と呼ぶ。一昔前にはそのゴトラをターバンのように巻く人びともいたらしいが、今はみなが布を三角形に折って頭にのせている。アラブ人と思われる男性は老いも若きもほとんどがこうしたサウジ衣装姿であるから、こちらもやはり「トーブ専門店」がある。

　モールの中をうろうろ歩いているとたくさんの女性たちとすれ違う。女性はすべてアバヤを着用している。頭の先から指先まで黒づくめで目だけ出しているのがサウジ人女性、アバヤを着て

いても頭髪を出しているのは白人・アジア人など、髪の毛が隠れるように頭にスカーフを巻きアバヤを着ているのが周辺諸国のアラブ人。以上は私が勝手に仕分けしたアルコバールでの女性の外出スタイルだ。アバヤを着ない白人女性を一、二回見かけたことがあるがそれはとても例外的だ。

女性たちが歩いているときアバヤの裾から見える足はジーパンが多い。足元は素足にヒールの高いサンダルやスニーカー。手にしているバッグは人それぞれだが、若いサウジ女性たち（たぶん）はバックルやタップがくっついたキラキラ系やブランド物が好きそうだ。コーチ、グッチ、フェンディなどのモノグラム調に人気があるのかよく目にする。しかし不思議なことにそれらのショップを見たことがない。
外国できっと買ってくるんだろうな〉
と思うことにする。あまり謎を深めて悩まないために。

さてアクセサリーはアラビアでは何といっても金。女性が身に着けているアクセサリーはたいてい金色だ。アラビアの女性たちはアクセサリーをお金代わりの財産として身に着けているとよく言われるが今の時代にそれはあるまいと思うのだが、ジャラジャラという音がしそうなほど腕や指に着けている女性もたしかに少しはいる。

ところで奇妙なことに働く女性の姿を見たことがない。モールの中のどんな店の店員もすべてが男性である。マクドナルドにもスタバにもドーナッツ屋さんにもそしてスーパーのレジにもアルバイトの若い女の子などはまったく見当たらない。また働いている店員がすべて（おそらく）外国人労働者だけというのもかなり奇妙なことに思われる。
男性ファッションの店に男性の店員がいても驚かないが、女性ファッションの店に男性店員しかいないのはドキッとする。「アバヤ屋さん」だって店員は男性だけだ。女の子が好きなファンシーグッズの店でもそうだし、ランジェリーショップ（下着や部屋着の店）だってそうなのだ。日本に来たらまちがいなく「イケメン」のおにいさんが笑顔で応対してくれるのは楽しいが、ブラジャーを試着するときはどうするのだろうか。試してみればよかったかもしれない。問題は私のような外国人女性ではなく若いサウジ女性の場合だ。
しかしよくよく考えてみると彼女たちは顔を隠しているんだから問題ないのかもしれない。社会というのは外からはなかなかわからないものだ。

モールでの楽しみはこんなふうにこの国独特の情景やコトがらや謎をいっぱい発見できることにある。なかでも私が最大級の関心を持ったのが「いつもヒマそうに腰かけているおじいさん」の存在である。
コンパウンドからはショッピングモールや中心街を結ぶ無料シャトルバスが出ている。私はシャトルバスに乗っていつも午前中モールにやってくる。主目的はスーパーでの食料品の買出しであるが、カフェでおしゃべりしたりウィンドウショッピングしたりはたまたウーマンウォッチしたりして時間をつぶすのだ。
そんなときいつもとても気にかかるおじいさんの姿がある。一人や二人というわけではない。また決まった人物でもなく決まった場所でもないが、モールの中のどこかに腰かけているおじいさんが必ずいる。最初のころはそれはサウジの光景の中の一要素として溶け込んで見えていた。

しかしあるときからその存在が「だまし絵」の中の異物のように突如として浮き上がってきたのだ（ちょっと大げさだけど）。おじいさんと書いたが、もしかしたらそれほどの年寄りではないかもしれない。素足にはサンダルを履き、トーブ（白いサウジ衣装）がちょっと短かめで色黒の足首が見えている。白いはずのトーブはちょっと黄ばんで汚れた感じである。もじゃもじゃの長い豊かなひげに鋭い眼光を持ち、痩せ型なのにがっちりした体型のおじいさんであることがなぜか共通点なのだ。そしてひとりぼっちで手持ち無沙汰にモールの中の広いコンコースの真ん中あたりに片膝立てて腰かけていたりする。太った年配サウジ人が多い中でやせていることがまず際立っているし、仙人のようなもじゃもじゃのあごひげはトレードマークである。

あれは宗教警察・ムタワのおじいさんに違いない〉と私は勝手にそれらしいおじいさんをマークして観た。ムタワのおじいさんとおぼしき人物が気になってしかたがない。べつに悪いことをしているわけではないが、ついついじっと見つめてしまい、するとおじいさんと目が合ってしまうこともしばしばである。
あるときモールの中のめざす店がわからなくなり、制服を着た警備員にたずねた。そのときムタワ風のおじいさんが足早にこちらに近づいてくるではないか。〈もしかして私？〉と思い、一瞬固まった。「女が警備員に話しかけるな！」とどなられるのかと咄嗟に思った。しかしおじいさんは遠くのほうを見やりながら二言三言小さく叫んで通りすぎていった。

宗教警察とはいったい何を見張って何を取り締まっているのか、じつは私にはよくわからない。女性が一人で街を歩いたり、アバヤを着ないで歩いたりすると逮捕されるなどの情報が耳に入ってくるがすべては噂でしかない。正真正銘のムタワと遭遇してみたいと秘かに思っている。しかし大事なことは宗教警察を挑発したり試そうなどとはゆめゆめ思わないことである。

あちこちのモールでは、今 Summer Sale をやっている。一年中、夏なのに Summer Sale とは…。もしかして一年中 Summer Sale だったりして…。きっと一年後にわかると思う。

2006.8.31

６　サッカー「日本・サウジ戦」

　今サッカー日本代表がサウジに来ている。アジアカップ予選のゲームが今晩八時半（日本時間四日深夜二時半～）にジッダで行われるそうだ。
「日本代表がサウジに行くから見てね！」
とサッカー好きの友人から情報をもらっていたのでスポーツ音痴の私もたまたま知っていた。
　数日前、夫の友人が私たちを夜の食事に誘ってくれてそのときサッカーの話になった。夫が「たぶん日本は負けちゃうだろうなあ」と弱気な見解を示したところ、陽気なヨルダン人のムハンマドさんは大げさなジェスチャーと満面の笑みで
「いや、日本にも六〇％のチャンスはあると思うよ。じゃあ千リアル 賭けよう！　日本が勝ったら私ね。サウジが勝ったらあなただ！」（千リアルは約三万円）
と、一気にまくしたてたので気弱な夫は困り顔。
「でもそれじゃ日本を応援できなくなるから困るわ」
と私が言うと、またまた間髪を入れずにムハンマドさん
「だいじょうぶ、じゃあこうしよう、もし日本が勝ったら私とあなたとで半々にしよう。それでオーケーでしょ」
　どうしてそんなにすぐに応酬の言葉が出てくるのか、とあっけにとられている私たち二人を見てムハンマドさんはにっこり笑っている。その場では私もすこし得したような気がしていたのだが、〈日本が勝った場合、五百リアル損するわけか〉と、極端に計算が遅い私は後でわかるのだった。トホホ…。

　で、いよいよ試合は今日だ。しかしちゃんとＴＶで見られるのかどうかわからない。というのも、ここ（コンパウンド内）で見られるのは、日本のケーブルＴＶのプログラム のようなものだけ。ＮＨＫワールド、ＢＢＣワールド、ＣＮＮ、ヒストリーチャンネルといったものだ。英語だけでなく、ロシア語、フランス語、韓国語などの放送もある。スポーツ専門チャンネルがあるので、たぶんそれで見られるのだろう。
　だが念のために今朝コンパウンドのオフィスに行って、サウジ・日本戦はどのチャンネルで見られるのかとたずねてきた。オフィスの受付のフィリピン人はほとんど関心がない様子だが、いちおう親切に調査してくれた。
「三つのスポーツチャンネルのどれかで見れるだろう！ 幸運を祈る！」
みたいな結果となり、私は今日これから三つのスポーツチャンネルなるものを探し出すというやっかいな仕事をするはめになった。ＴＶ番組一覧表などという便利なものはどこにも見当たらないのだ。

　ところで日本の勝率六〇％の根拠は何なのかすごく気になる。根拠など何もないのに日本人である私たちにエールを送ってくれただけなんだ、きっと。ムハンマドさんはそういうふうに気配りができて会話を盛り上げてくれるタイプの人なんだ。いやもしかしたらただの調子のいい男なのかもしれない。
　わが家の前のブリティッシュスクール、明日から新学期が始まるらしい。

2006.9.3

7　アラムコという企業

　アラムコ社員のＭさんに連れられてアラムコ本社に見学に行った。そこは広大な敷地の上に展開している「アラムコ・ランド」と呼べそうなところだった。
　日が暮れてから一時間ほど経っていた。車は広くゆったりした道路を走り抜けてやがて高速道路の料金所のようなところで停車した。ブースがずらりと並び、幾筋もの車線が走っている。混雑するときにはこのすべての車線に車が行列をつくるのだろうが、いまの時間は、二、三ヵ所のブースだけが明かりを灯している。運転しているＭさんはブースから出てきた男と顔なじみらしくアラビア語の会話が飛び交う。
　ここは料金所ではなくチェックポイントすなわち検問所だということが少ない明かりの下でだんだんわかってくる。検問所を抜けて進んでいくと建物や歩いている人びとの姿が見えてくる。車を降りて歩き出すと行き交う人びとの服装にまず驚いた。アジア系の顔立ちの男女が多く、みなタンクトップやノースリーブに短パンというかなり露出度の高い服装をしている。私はというとアバヤを着ている。
　「ここではアバヤを着ても着なくてもどちらでもよい」と言われた。しかし私はアバヤを脱ぐことができない。まだ二ヵ月ほどしかサウジにいないのにすでにアバヤの魔法にかかってしまったかのようだ。人前でアバヤを着ているととても安心できる。安心感に文字通り包まれている気分でいられるのだ。

　正式にはサウジ・アラムコという。現在は国営企業だが、サウジ・アラムコとなる前のアラムコ（ＡＲＡＭＣＯ）はもともとアメリカの企業である。石油を求めてサウジにやってきたアメリカ人がここにほとんど治外法権のアメリカ村「アラムコ・ランド」を作った。そこの中ではアメリカ的生活を謳歌できる。女性はアバヤを着る必要もなく、車を運転することもできる。
　スーパーマーケット、図書館、レストラン、映画館、そして広いゴルフ場などを見て回った。博物館のようなところ（アラムコ展示館か？）をたずねたがすでに閉館時間となっていて入れなかった。

　Ｍさんはレストランで食事しようと言う。レストランで食事というので期待していたら、行き着いたのは社員食堂だった。かなりがっかりしたのだが、しかし気を取り直してずらりとならべられた料理を物色して回る。カフェテリア方式（セルフサービス式）で、肉や魚のフライ、煮込み料理、サラダ、デザートなどが大きなステンレスのバットに大量に盛られている。ならんだ料理の奥の通路には透明ビニールのキャップをかぶったアジア人やらアラブ人のスタッフたちが立っている。見ていて食欲をそそられるものがないのだが、お腹が空いていたのでニオイに釣られて自分の皿に何品かの料理を取り分けた。早々と自分の食べる料理を決めていたＭさんがレジで待っていた。Ｍさんは夫と私の分の料金を支払ってくれた。
　レストランはすごーく広く天井が高い。マクドナルドかケンタッキーフライドチキンの店のような冷やかな椅子とテーブルが並び、まるで飾り気がなくていかにも社員食堂という風情なのだが、現にここはアラムコの社員食堂なんである。

　さて三人で食卓に着き、食事が始まるとサッカーの話になった。そう、サウジ・日本戦に千リアル賭けることになったあのサッカー談義はここでなされたものだったのだ。アラムコ社員のＭさんとは陽気なヨルダン人のムハンマドさんなのだ。
　食事も終わりゆったりした気分になったとたん〈そういえば、だれもアバヤを着ていない。私だけが着てるのも奇異だ〉と思い、やっとアバヤを脱ぐことができたのだった。

2006.9.3

【引用コラム】

「…サウジアラビアでは一九三九年に石油の生産が開始され、第二次世界大戦後に本格的な生産が開始された。当時はアラムコという米国の国際石油資本（メジャーズ）四社の共同企業がほぼ独占的にサウジアラビアの石油生産を行っていた。一九五〇～六〇年代の国際石油市場はメジャーズの強力な支配下にあり、産油国の立場は弱いものであったが、一九七〇年代以降、資源ナショナリズムを背景に産油国の発言力が高まっていく。一九七二年のリヤド協定においてサウジアラビアでもアラムコに事業参加（権益取得）することになり、リヤド協定の合意より早く一九八〇年にアラムコの権益の一〇〇％を取得し、完全国有化が実施された。一九八八年には旧アラムコとの補償交渉がまとまり、新たに国営石油会社としてサウ

ジアラムコが設立され、現在に至っている。…」
（細井長「石油・ガスセクターの今後」中村覚編著『サウジを知るための６５章』明石書店）

８　ちょっとドバイまで

　九月五日から八日までドバイに行ってきた。行く目的は四つあったのだが、なんといっても「お酒を飲むこと」が最大の目的だった。
　二ヵ月弱の間、ホンモノのお酒を飲んでいないのだからそれはもう悲壮な期待を胸にして出かけたのだ。だからといって日がな一日お酒を飲んでいたわけではなく、昼間はふつうの観光客としてあちらこちらに出向いていった。

　ドバイ空港に着くと車でホテルに向かった。明るい海辺のリゾート地が目の前に広がってくる風景を想像していたらそれはまるで違っていて道路の両側には荒涼とした荒地が続いた。やがて高速道路とガラス張りの高層ビルが織りなす大都会の光景が現れてきて、車は幾重にも旋回し、行く手には超高層のツインタワーが右手に見えたり左手に見えたりした。最後にそのツインタワー（エミレーツ・タワーズ）を真正面に見ながら進みそのかなり手前で車を降りた。タワーの一つはオフィスビルでもう一方はホテルだ。ツインタワーはランドマークになっていただけで、私たちのホテルは広い道路の反対側にあった。
　目の前の道路は片側四車線あるいは五車線もあろうかというぐらいに広い。さらに車道と同じぐらい広い歩道がついている。通りはただ広いだけじゃなくやけに明るくて白い。そしてなんとなく埃っぽくて「新ピカ」のすがすがしい匂いがしていた。ここは新しいビジネス街なのだ。

　翌日ホテルの上層階から通りをながめて見た。通りの両側にはまばゆいばかりに新しい高層ビルが建ち並んでいる。並んでいるが密集してはいない。ビルとビルの谷間から明るい陽がこぼれて通りを照らしている。そして街は意外にも緑豊かである。明るい摩天楼街ができあがっているというわけだ。

　さて、ドバイの街に夕陽が沈むころ、私たちは酒を飲みにいそいそと出かけていった。初日の晩である。慣れない土地を旅行中なので緊張していないわけではないがきっと二人とも嬉しさで口元が弛んでいたに違いないと思う（いやだ、いやだ）。日本酒が飲める日本食レストランは古めかしい繁華街の小さなホテルの中にあった。焼き鳥、おでん、寿司そして日本酒を楽しんだ。ドバイでは名の知れた「ヤキトリ・ハウス」という日本食レストランである。客はほぼ全員が日本人だった。早い時間から満席となるほどの人気店のようだ。ドバイにいる間じゅう毎日通いたいぐらいだったが、そうはいかないのだ。ガイドブックには「良心的な値段」と書かれていたが、私たちにはそうは思えなかった。大酒飲みの夫と私である。毎晩来るには「良心がとがめるような値段」だった。

　しかしそこでは思いがけない収穫があった。ドバイで果たすべき二つ目の目的は「日本食食材の調達」だった。日本食の食材といってもこれがなかなかに抽象的なのだ。たとえば乾物や缶詰類は日本から購入できるシステムがある。だから欲しいものというのは基本的にナマモノである。アルコバールにはスーパーマーケットがたくさんあるから生活に困ることはない。しかし「脂ののった秋刀魚の塩焼き大根おろし付きが食べたいな」というような欲求は満たされない（ま、とうぜんだが）。まず「秋刀魚」が無理だし、「脂ののった魚」という概念がそもそもない。大根（らしきもの）は売っているが、細くて小さくてほとんどの場合スカスカに枯れている（いったいだれが買うのだろうかと思いながら私がいつも買っている）。日本の大根が大人の女性の足

だとしたら、こちらの大根は栄養失調の赤ん坊の足だ（赤ん坊でも健康ならもっと太くてみずみずしい）。
　脂ののった秋刀魚の塩焼き大根おろし付きというのは日本食へのこだわりの象徴である。

　「日本食の食料品を買って帰りたいのですが、いいお店があったら教えてください」と帰り際に日本人店長さんにたずねたら快く素晴らしい情報をくださった。「そのスーパーではタコも手に入りますよ」とのこと。そして店を出ると私たちは早速そのスーパーをめざした。「△△で豆腐を売っている」「〇〇では味醂が買える」などの情報交換はサウジに滞在する日本人同士のあいさつ言葉である。集まってくる情報は正確とも不正確ともなんとも言いがたい。実際に自分で足を運び試してみるしかないということを滞在二ヵ月にして早くも了解していた。

　ドバイで日本食料を売っているスーパーはとうぜんながら事前にチェック済みである。しかし店長さんお薦めのスーパーの情報ははじめてだった。そして行ってみてその充実した品揃えにはびっくり仰天し、写真を撮りまくってしまった。明星中華三昧とか丸美屋麻婆豆腐の素とかがスーパーの棚に並んでいるというだけで懐かしい過去にタイムスリップしたような気持ちだった。畳二枚分ほどのスペースの「日本食」コーナーにはインスタントラーメンや味噌醤油などの乾物缶詰系「日本食」がぎっしり並んでいる。冷蔵庫と冷凍庫には生干しの秋刀魚・鯖・鰯などが仲良く勢ぞろいし、納豆・油揚げ・かまぼこやさつま揚げなどの練り物、ニチレイの冷凍食品といったものもある。
　日本食料・食材なのに中国製（東南アジア製も）と書かれていることが少なくなく、賞味期限切れも珍しくない。元々の表示の上に別のラベル（例えば輸入品としての）を貼る日付改ざんもある。そういうものを買わないかというとそんなこともなく買ってしまう。では表示をチェックする意味もないように思われるが、商品をひとつずつチェックしているとだんだん心に冷静さが戻っていった。最初の勢いだと持って帰れないほど買い込みそうだった。

　ついでにもうひとつ発見があった。豚肉禁止のサウジだが、ここドバイでは豚肉のハムやソーセージが手に入る。しかし堂々と売られているわけではなかった。店内をつぶさに隈なく見て回り隅っこに目立たないように作られた「ポークコーナー」を見つけたのだ。中東諸国ではターキーハム・ビーフハムなどのポーク以外のハムが主流だ。まずいわけではないがヨーロッパ製のポークハムのほうが歯ごたえ・食感・風味などがすぐれていておいしい。

　ドバイを発つ日の、空港に向かうぎりぎりの時刻に再びこのスーパーに買い出しに来ることを決めて、その日はチョコレートだけを買って帰った。スーパーの名はチョイスラム、ハイアットリージェンシーの一階にある。同じフロアには高級（？）日本食レストラン京（みやこ）や丸い大きなアイススケートリンクもある。スーパーはそのスケートリンクに沿って歩いてやっと入口が見つかるような「隠れ家スーパー」である。

　三つ目の目的は観光。いま脚光を浴びている「すがすがしい匂いのする」ドバイも、古い街並みが残された家いえが密集するお伽の界隈（くに）のような旧市街もどちらもエキゾチックで魅力的である。アクセサリー・香辛料・衣類・土産品などがならぶスーク（市場）には雑多な人種が行き交っていた。
　クリーク（運河）に浮かぶアブラ（乗合船）に乗り、砂漠ツアーやベリーダンスショーを楽

しみ、ジュメイラビーチホテル（高くて泊まれない）を仰ぎ見ながらだれもいない美しいビーチで砂と貝殻を拾ったりして初めてのドバイ観光は盛りだくさんであった。

　いまアラブの金融と経済の中心地として世界中から注目を集め、またアラブ世界でもっとも自由な国であり、世界中の金持ちが新しいリゾート地として訪れる憧れの場所である（らしい）。実際に見てきてなおかつ（らしい）というのにはちょっとわけがある。雑誌や映像の中で垣間見たドバイはそこで生活する人びとの肌の色さえも黄金色に輝いていそうなほどきらびやに見えた。期待が大きすぎると旅先でがっかりすることはよくあることだがドバイについては過大な宣伝文句とイメージについつい乗せられていたというのが正直な感想だ。どこを旅してもそこには光と影があり、その光と影とを同時に旅するほうが私には性にあっている。

　ドバイ空港には、インドやパキスタンあるいはアラブ周辺諸国と思しき民族衣装の人びとが溢れ、群れをなしていた。彼ら老若男女はみな出稼ぎ労働者である。おそらく観光客の数よりも多い。現在、産油国はどこもバブル経済に沸いているらしいが、ドバイではその象徴的な光景を目の当たりにした。「ドバイ・ウォーターフロント」と呼ばれる一帯では、一千棟か二千棟かその数も知れないぐらいのビル建築工事が行われている。どちらを向いてもビル工事現場だけが見渡せるというのもすごい光景だ。未完の摩天楼群を見ていると、そこがすでに廃墟であるような錯覚にとらわれてしまう。それらが地上に投げかける暗い影。ブリューゲルが描いたバベルの塔の絵を思い出していた。二、三年後、そこにどのような光景が見られるのだろうか。

　帰路はバーレーンまで飛行機で飛び、そこからあの海上橋コーズウェイを渡ってサウジに戻った。橋の途中の国境を無事に通過するまでほんのちょっぴり心配があった。バッグの底深くにポークハムが詰め込まれていたからだ。終わってしまえば何のことはない。〈私ってけっこう臆病者だなあ〉と自嘲してみる。そして国境を越えたことで最後に残っていた旅の目的も完了したのだ。
　じつはそれこそが旅の真の目的であった。「リエントリービザ」が発給され、それに合わせて三ヵ月以内にサウジ国外にいったん出てまた戻らなければならないというシステムなのだ。現在およそ半年に一回は必ずサウジ国外に出てそして帰って来ないといけない。そのために隣国のＵＡＥのドバイに行ってきたのだ。サウジのビザのシステムはいまだよく理解できない。

2006.9.10

９　アルコバールからラービグへ

　九月に入ってまもないある早朝、戸外に出てみると室内と同じぐらいの快適な温度を感じることができた。〈すご〜い涼しい！　今朝は二〇度ぐらいかな〉と、初めての秋らしさに感動をおぼえたのだが、実際の気温は三三度。湿度がかなり下がったからなのだが、私自身がこちらの気候に慣れてきたせいもある。
　そして九月の声を聞くと途端に私の住むコンパウンドが活き活きしてきた。夏のバカンスを終えて、このコンパウンドにたくさんの人たちが帰ってきたり、九月から新しく住み着く人が多くいるそうだ。なわけで、ヒマな奥さんを対象にしたさまざまなサークルや催しへのお誘いが九月とともにやってきた。

　先日も、Coffee Morning というコンパウンド内の奥さん方の集いに参加してきた。一〇〇人ぐらいいただろうか、ほぼ九割は欧米人（アフリカ系含む）で、あと残りは日本人と韓国人だった。ここにはこんなにいっぱい人が住んでいたのだとあらためて驚いてしまった。七月にここに到着した私は、まるでゴーストタウンのように静まり返ったコンパウンドに住んでいたというわけだ。人懐こく話しかけてくれるアメリカ人もたくさんいて、ああ、ここにずっと居られたら、この人たちと友だちになれて、きっと英語の勉強にもなるのに…、残念ながら私はまもなくここを去る身。

　引越し作業に明け暮れた長い一週間が終わった。今朝九時、約束どおりに二人のフィリピン人作業員がやってきて、ラービグに送る荷物を運んでいった。コンパウンドは家具付きなので送る荷物は、服や私物、備わっていない小さな家電品などだ。

　私がこれから向かう町は、サウジの地の果て（向こうから見るとこちらが地の果てになる）。欧米人が多く暮らすここアルコバールにくらべてほとんどがサウジ人の保守的な田舎町と言われるラービグ。保守的という意味は、イスラム諸国の中で最も宗教的に厳格なサウジアラビアの中でさらに厳格という意味だ。これまでは、町に出かけるとき私たち外国人女性は、顔や頭にベール（あるいはスカーフ）を巻かなくてもよかったのだが、これからは近くのスーパーへ行くにも、全身を隠さないといけないのかも…。食料品もまともなものが手に入るのだろうか。何もやることもなく、行くところもなかったら、つまらなくて耐えられないかもしれない。
　ラービグというところは、先日サッカーの日本サウジ戦が行われたジッダの近くにある。近いといっても一五〇キロ離れている。
　ラービグには、現在、アラムコの製油所がすでにあるが、それを世界最大級の製油所＆石油化学工場にするプロジェクトらしい。私たちが住むところは、アラムコ社員の住むコミュニティの中である。ほとんどがサウジ人だと言われているがそれもまだよくわからない。そしてラービグには現在インターネットが整備されておらず、使えるようになるのには一ヵ月か二ヵ月はかかると言われている。

　というわけでラービグに移ってからしばらくはインターネットも使えません。開通したらできるだけ早くメールしたいと思います。
　日本はもうずいぶん涼しいようですね。ニュースの映像では、雨降りの日が多いようですね。九月になって私のカレンダーは俄かにスケジュールで埋め尽くされました。一つ一つクリアし、

今日やっとこのメールを書いています。パソコンは送らずに手で持っていきます。
　明日はいよいよここアルコバールを去っていきます。

2006.9.16

１０　ラマダン中のデカダンス

　ラービグから初めてメールします。と言ってもまだ、自宅にインターネットが開通したわけではないのです。ホテル内にあるパソコンルームのＬＡＮを使っています。いつも使えるのかどうかわかりません。とにかく今日は運よく使えました。

　ひと頃、朝晩に涼しさを感じ、サウジにも「秋」というものがあるのだと喜んでいたが、それは単なる希望的早計だった。英語チャンネルの世界の気象情報では今もってリヤド四〇度。このあたりも似たような気温だろう。それでも湿度が低い日は四〇度でもあまり暑さを感じないもので、この見解にわれながら驚いている。
　しかしここは紅海の沿岸。一日中、湿った空気が流れ込んでくるような気がする。なのにほとんど潮の香りがしないのも不思議だ。

　こちらは現在、ラマダン中（九月二四日から）。ラマダンとはご存知のとおり断食の期間のことで、ほぼ一ヵ月間続く。ムスリム（イスラム教徒）たちはどんな生活を送るのかというと、夜明けとともに断食を始め、太陽が沈むと同時に一日の断食を終える。太陽が地上にあるあいだは、飲食一切なしである。タバコを吸うのも禁止されている。そして日没と同時に一日の禁が解かれ、人びとはできるだけおおぜいで飲んだり食べたりし、真夜中まで起きているらしい。ラマダン中は昼間はクローズしている店が多い。夫の会社のサウジ人たちは午後一時過ぎには帰宅してしまうそうだ（きっと午睡するんだろうな）。

　ラマダンとは、イスラムの人びとにとってハレの日なのだろう。ちょっとした祭りの気分である。ホテルのロビーにはイルミネーションが飾られて屋外で食事ができるようにテントが張り出されていたりする。海辺でおおぜい集まって食べたり語らったりしている光景も目にした（男性ばかりの集団だったが）。またラマダン中モスクでは無料の食事が配られるため日没時にはモスクの庭は出稼ぎの労働者たちでいっぱいになる。

　モスクから流れてくるアザーン（お祈りを知らせる声）もなんだか大音響になったような気がする。今、私たちが住んでいるところはモスクのすぐそば。通常は窓を閉めていれば、音はほと

んど気にならないでいた。ところがラマダンになるとボリュームアップされた拡声器からはただのアザーンではない気合いの入った説教のような声や演説らしき声が長々と聞こえ出した。

「ムスリムが断食をする目的は、飢えを体験することによって、食物と、それを与えてくれた神への感謝をあらたにし、神をおもうことである。食べることのできない者の苦しみを知るためでもある」（片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書）とあるように、人びとは神と対峙するこの月に大いなる精神的高揚をもつことができるのだそうだ。
近年、世界的にイスラム復興の気運が高まってきていてラマダンも形骸化するどころか、ますます盛んにおこなわれているらしい。崇高なものに立ち向かうという行為にはちょっと羨ましさを感じないでもないが…。私はというと、ラマダンとはぜんぜん無関係な生活をしている。

私は今どんな生活をしてるかというと、本を読んだりＤＶＤを見たりマニキュアだってていねいに二度塗りできるほどヒマ！　昼寝だってできるけど、時間がもったいないからしない。ああそうそう、バルコニーから強力な西陽が射しこんでくるので、午後になると本やらポータブルＣＤプレーヤーを片手に日焼けにいそしんでいる（といっても足だけ。顔はありえないから）。そんなわけでずいぶん優雅に暮らしているように見えるだろうが、心はかなりストレス状態にある。

今はなぜか単身者用アパートメントに住んでいる。二人なのでちょっとグレードの高いスイートルーム。広めの１ＬＤＫといったところだ。パリのアパルトマンに住んでる感じ。なぜパリかって？　天井が高くていちおうシックな調度類が設備されていて古い映画に出てくるパリのアパルトマンの風情が漂っているから（室内だけ…）ね。築二〇年てとこだからとてもパリにはおよばないが…。困ったことはここが仮住まいだということ。ラービグに来てもう半月が経ったというのに、ほとんど荷物は封をしたままだ。
で、なぜ単身者用アパートメントなのかというと、私たち夫婦に正式にあてがわれる予定の家がまだできていないからなのだ。家はあるのだ、築二〇年ほどの。その壁の塗り替えだとか調度類の設置だとかがまだだという。その連絡を日本の担当者からもらったのはなんとラービグに経つ前の日だった。

「いったいだれのせいなの？」と夫に問いただしても、行き着くところは「サウジ人の仕事だから…」なので、やはり笑って憤りをゴマ化すしかない。とにかくこの国では何でも起こりうるということがよーくわかった。彼らは宗教以外では、ほんとうにボヘミアンのよう。もともとベドウィンだから、同じようなものだね、その奔放さにおいては。
だったら、私も自分自身を旅人だと考えればいい。今は旅の途上なんだから、限られた服や身の回り品だけを持ち、食事も作らず、海と砂漠の睡郷をのんびり楽しむとしようか。しょせんこの世は夢幻のごとき仮の宿。
「でもねえ、いったいいつ家はできるのかしら？」
「インシャッラー！」

2006.10.4

１１　私の住んでいるところ

一一月七日（火）やっと広い一戸建てに移ることができた。家はこれまで住んでいたアパートから一〇分ぐらいの場所にある。間取りは一階にキッチン、ダイニング、リビング、二階に広々とした寝室二つとバスルームがあり、各部屋には家具がセットされている。建物を真ん中にはさんで前庭と後庭があり、日本の小さな家が一〇軒ぐらい建ちそうな広さだ。「三年間だけのわが家」だが、庭いじりやインテリアを大いに楽しもうと思っている。家にはメイドルームも付いている。トイレ・シャワー室、エアコン付きの広々としたワンルーム、自分の部屋にしてもいいぐらい。

ここラービグ・コミュニティはサウジ・アラムコ社（以下アラムコ）の社員とその関係の社員ばかりが住む居住区。二ヵ所の検問所を通過しないと出入りできないようになっていて、日本で見る米軍住宅のような感じである。今年二月サウジ東部のアブ・カイクというところで石油関連施設が襲われたと聞いている。ここも石油関連施設、テロの対象になりうるということだ。そういえば以前アラムコ本社の敷地内に連れていってもらったときもまるで高速道路の料金所のような検問所を三ヵ所も通過したように記憶している。
グーグルの衛星写真を見てはじめて知ったのだが、コミュニティは紅海に張り出した小さな小さな半島の上にある。西側（紅海側）はきれいに整備された浜辺が続き、それ以外の場所は金網のフェンスで囲まれており、フェンスの外側には空虚な砂地が広がっている。そしてこのコミュニティは紅海に沿っておよそ南北に二キロ東西に一キロほどの細長い楕円形をしている。ぐるっと一周り散歩するとちょうどいい運動になる。

コミュニティ内には広々とした敷地と高い塀に囲まれた家族用の戸建てと単身者用のアパート（すべて二階建て）など千棟近い建物がある。幹線道路はすべて片側二車線で広々しているし、駐車スペースもゆったりと広い。
居住者はサウジ人だけじゃないようだ。欧米人も少し見かける。今は日本人が続々と入ってきているので、しばらくのあいだここの居住者人口は日本人がサウジ人に次いで二番目に多いということになるのだろう。ただし欧米人も日本人も男性ばかり。まもなく日本食レストランができる予定らしい。
コミュニティの真ん中には、モスク、スーパーマーケット、ホテルなどがある。モスクは中に入れないのでどうなっているのかわからないが、スーパーは日本人にとってはいい品揃えとはいえない。ホテルもこぎれいそうだが、日本の観光地にある国民宿舎みたいな殺風景な雰囲気だ。他にスポーツ施設、小学校、中学校などがあるが、男女別々の施設である。

試しに女性用のスポーツ施設に行ってみた。恐る恐るドアを開いて入って行くと元気のいい「welcome」の声が飛んできた。私は初の日本人来訪者である。スタッフのフィリピン人女性たちがみな集まってきて挨拶し、施設内をぞろぞろと案内してくれた。図書室、キッズルーム、美容室、ジム、カフェ、プール、シャワールーム、サウナ、卓球室、テレビ室などなどを誇らしげに見せてくれた。スタッフだけで一〇人近い。そしてその日午前中の利用者は私だけだった。ヒマなのでジムとプールを利用する方法を聞き、次回出直すことにした。そういえば、入場の際に携帯を取り上げられた。カメラが付いているからなのだが、女性用施設は女性はもとより施設自体も撮影が禁止されている。

コミュニティ内は、樹木や草花がよく手入れされていて緑を楽しむことができるが、隅々までというわけではない。まったく緑が見当たらない砂地も多い。雨がほとんど降らないこの国で緑を育て維持するのは並大抵のことではない。芝生にはスプリンクラーが、木々の根元や植え込みには自動散水装置がかならず設置されていて、一定の間隔で水が撒かれるようになっているのだ。アルコバールのコンパウンドでいつも見ていた不可思議な夏の枯葉は、思うにただ水が不足していただけか（「熱〜い暑いサウジ生活のはじまり」のページ参照）。ここでは降ってくる枯葉を見ない。きっと充分な水分をもらえているのだろう。

最もよく目にする植物はナツメ椰子。街路樹としてずらり並んでいる。二、三本おきの雌木には小さな黄色いナツメ椰子の実がたわわに実っている。幹は太く表面は松かさのようにゴツゴツしていて、高さは一〇〜一五メートルほどもある。寿命は百年以上と言われており、紀元前数千年以前から砂漠の民に食料を提供しつづけている「生命の樹」なのだ。この国に「国樹」という考え方があるとすればナツメ椰子はまさにサウジアラビアの「国樹」と言える。サウジ王家の紋章は「二本の剣と椰子」を象った図である。

コミュニティ内の街路に立つナツメ椰子

　このナツメ椰子の実を乾燥させたものがサウジの代表的なスウィーツ「デーツ」だ。乾燥させずに生のままでも食す。熟していないとガリガリした食感でかつ渋くてとてもおいしいとは思えないが、平気で食べているサウジ人を見たことがある（サウジアラビア航空の機内ではアラビックコーヒーとともに半生のデーツが供される）。茶色く熟してくると甘いチーズのようになり、とても美味。デーツは私の大のお気に入りとなった。

　ナツメ椰子の他にもたくさんの大きな木々がいつも風にそよいでいる。海辺なのでつねに強風が吹いているからだ。ハイビスカスやブーゲンビリアといった南国の花はもちろん、大きく育った夾竹桃やエニシダなども見かける。そしてクチナシはなんと今が花盛り。日本では室内観葉植物かと思っていたベンジャミンはこの国では屋外植物。なぜか奇妙なかたちに剪定されたベンジ

ャミンが芸術的オブジェのようにたたずんでいる。芝生の外縁や花壇を飾る草花は私たちがよく知っている夏の草花ばかりだ。ペチュニア、マリーゴールド、日々草、ダリア、カンナ、鶏頭などなど。いっぱいありすぎてあとは名前が思い出せない。

　ところで一〇月の終わりに豪雨を体験した。地元の人の話では、なんと三〇年ぶりの豪雨だったそうだ。未明に風と雷をともなった雨が降り出し、停電。翌日もまた未明に雷雨、停電。三日目は雨はなく朝からどんより曇り空。午後になってまた雷雨となった。この国は雨対策ができていないので、幹線道路はあちこちで冠水し、ジッダではちょっとした洪水だったらしい。
　このコミュニティ内でもあちこちの家で雨漏りがあったり、地面にはいつまでも水たまりが残っていたりした。豪雨の後にコミュニティを歩いてみたら、絨毯を塀の上で干してる家やゴミ箱にたくさんの蛍光灯を捨てている家、そしてどこで使用していたのか大きなベニヤ板を何枚も捨てている家などがあった。
　とにかくサウジの空にも雲があることを知った。その雨を境に朝晩だいぶ涼しくなり、二〇度を下回るようになった。しかし昼間は相変わらず三〇度を越えている。

　コミュニティを出て、車で一五分ほどのところにラービグタウン（と日本人が呼んでいる町）がある。タクシーに乗っていちどだけ見に行ってきた。
　ラマダン中の午前中だったので、町じゅうのシャッターはほとんど閉じられていた。一〇分も歩けば端から端まで行けそうな小さな町。砂埃に染まった低い町並み。店の中が見える開閉式のシャッターはどれもみな原色のブルーのペンキに塗られ、掲げられた看板は同じく原色でほとんどがアラビア語のみで書かれていた。人通りもほとんどなくすれ違うのは男性ばかり。まるで古い映画に出てきそうな町で、私の好奇心は大いに満たされ、感動したと言ってもいいぐらいだった。次回は、夜、人びとでごったがえすラービグタウンに行くことを楽しみにしているのだが、夫はまったく興味がない様子。夫の協力なしに私が一人で出かけることができないというのに。
「ろくな店もなし、おいしいものが食べられるわけじゃなし、物好きだねえ」

　あのね、物好きじゃないと、この国では長く単調な日々を過ごせないの。一週間に一度でもすごくアラビアンな行事や出来事があれば、物好きな私はそれで満足。また次の一週間を元気に過ごせるというものだ。楽しいことがなかったら気分が落ち込んでイライラが募るばかりだと思う。

　ラービグは、石油の施設ができる前は小さな漁村だったという。漁村の部分は、きっと今もどこかに残されているのだろう。またこのあたりの人びとはおそらく肉よりも魚を食べて暮らしてきたらしい。私たち日本人に少し似た生活があると思うとなぜかますます親しみが湧いてくる。

2006.11.22

１２　はじめての日本人女性

　さて話は少しさかのぼります。私がラービグにはじめてやって来た日からの一週間のことです。
　九月一七日（日）朝八時、ダンマン空港を飛び立ち一〇時ジッダ空港に到着した。空港に着くと私たちは脇目も振らずすぐに手配してあったタクシーに乗り込んだ。古いＧＭは一五〇キロ先のラービグめざして時速一三〇キロで走りつづけた。あわただしく走り去る車窓の景色は右を向いても左を向いても荒涼とした砂地ばかりがつづいた。景色として意外だったのはジッダの市街地を抜けたあたりから進行方向の右手に（紅海と反対側に）長く連なった山々が見えていたことだ。晴れ渡った空の下で稜線が白く輝いていた。山というよりもどこまでもつづく高地が地平線代わりに見えていたというほうがいいかもしれない。その高地は私たちが走っている道路から遠いのか近いのかまるでわからない。風景を遮るものがないので距離感がまったく涌いてこないのだ。

　大きなトラックやタンクローリーなどを数え切れないほど追い越してタクシーはラービグ・コミュニティに着いた。色とりどりの花とＷＥＬＣＯＭＥの文字が来訪者を迎えてくれるのはセキュリティポイントである。夫が万事手配しておいてくれたのだろう、難なくポイントを通過した。しかし次のポイントにさしかかったときタクシーは右側の小さな通路に入って行き、白い小屋の前で停車した。小屋には切符売場のような小窓が一ヵ所付いている。タクシーの運転手が私たちに何かしゃべっているのだが理解できない。しかたなく私が降りて窓口に行くと小窓がスッと開いた。黒い布で顔を隠した女性が何も言わずに私に一枚のカードを手渡し、またたくまに小窓は閉められた。私はタクシーに戻り、受け取ったカードを運転手に渡したのだが、彼はそのまま返してこなかった。

　タクシーは脇道から再び本線に戻り、そこで本当のセキュリティチェックを受けることになった。私はアバヤを着てはいるが、髪や顔まで隠していない。タクシーの運転手は先ほど私から受け取ったカードをセキュリティの男に渡したようだ。
　セキュリティの男たちがじろじろと車内の私を見ている。強い口調で何やら叫んでいる男もいる。何も悪いことをしていないはずだがなぜか少々後ろめたい。女であるというだけで何か間

違いを犯してしまった気分である。何事もなく通過できたものの、私の受け取ったカードの意味はそのときは理解できなかった。だいぶん後になってわかったそのカードの意味はこうだ。ここのセキュリティポイントを通過する女性はたいてい顔を布で覆っている。だから女性の識別は女性が行い、パスしたことを証すカードだったのだ。

　ラービグ・コミュニティの中では（日本の）会社の人事・総務部門の担当者たちが私たちを出迎えてくれた。
「（コミュニティの中では）アバヤは着ても着なくてもどちらでもいいですよ」
「〇〇さん（経営陣のサウジ人）も着ないでいいって言ってましたよ」
とまずはコミュニティ内でのドレス・コードについての「指針」を伝えてくれたのだが、ルールとして明確ではない。

　その日の夕方私は早速アバヤを着ないでスーパーへ買物に出かけた。おおぜいの子どもたちが目をクリクリさせてニヤニヤ笑いながら私のまわりにやってきた。女の子は見当たらず男の子ばかりである。私をからかうような表情をしたりアバヤを着ていないことを咎めるようなまなざしの子などが入れ替わり立ち替わりやってくる。
　恥ずかしそうに斜めに私を見て「ヤーバーン？」とたずねる男の子がいた。私が自分を指して「ヤーバーニー」と言ったら、「ヤーバーニーヤ」と訂正してくれた。ヤーバーンは日本、ヤーバーニーは日本人男性、ヤーバーニーヤは日本人女性という意味である。

　翌日、日本人のための歓迎イベントが男性専用スポーツセンターで行われた。男性ばかりだが日本人がすでに百人以上もここのコミュニティに来ているという。夕方の開催時間に私は夫に付いて行った。男性用のスポーツ施設なのでふだん女性は入れないのだが、特別に入れてもらえた。女性は私ひとりだけであり、アバヤも着ていない。ジーパンと長袖のジャケット姿で、おまけに化粧もしていない。
　階段状の観覧席の付いた体育館には日本人を含めて二百人ほどの男性が集まっていた。トーブ（サウジ衣装）姿の男性も多い。バスケットボールの試合などが行われ、参加者はその都度その場で選ばれた。とつぜん夫と私がアリーナに呼ばれ、ゲームを課された。事前に何も聞かされていなかったのですごくあわてたし、恥ずかしかったが、ゲームの参加賞としてラジカセとＤＶＤプレーヤーをもらった。賞品は会社のトップのサウジ人 D さんから直接手渡された。私はサウジという国の得たいの知れない大きさをそのときはじめて感じた。

　ゲームは二時間ぐらいでお開きになった。最後にサウジの伝統的な踊りが披露された。男性たちが太鼓を叩いたり剣を高く振りかざしたりしながら輪になって踊るのである。スポーツ大会終了後はプールサイドに用意されていた夕食を皆で囲んだ。アルコールはない。水かペプシかセブンナップだった。

　もうひとつここに住みつくためにすぐやらねばならぬことがあった。コミュニティ在住者としてのＩＤカード取得である。私は親切な日本人の担当者にくっついて申請に出向いた。コミュニティの外に出るのでアバヤを着用した。コミュニティを出るとあたりは荒涼たる砂漠であることはすでに伝えたと思う。
　一五分ほど走って車から降りると砂埃が舞っていた。空がクリーム色に霞むほど風の強い日だった。着いた場所にはボンネット形のバスやピックアップ、乗用車などが思い思いに止まっていた。平屋のプレハブが目の前に建っている。立ち止まって携帯電話でしゃべる男。そわそわと歩きながら携帯電話でしゃべる男。そして何もしないでボーっと立っている男。どちらを向いても男ばかりがうろうろしている。

　促されて私は建物の中に入っていった。簡易建築物だが出入口が二重扉になっているのは暑いサウジならではの構造だ。内扉を開くと広い室内には出稼ぎ労働者たちが群れをなしていた。男たちはインド人かパキスタン人かバングラデシュ人かのいずれかである。民族衣装を身にまとっている者もいるがたいていは粗末なシャツと黒っぽいズボンをはいている。二百人かあるいは三百人もいるだろうか。中央にずらりと並んでいるイスはすべて塞がっている。壁際にもおおぜいが並んで立っているから私が立つ場所すらもない。しかたなく私はいま自分が入ってきた扉を背にして立った。中国人の出稼ぎ労働者の集団も少しばかりいたが、日本人は連れてきてくれたＴさんと私だけであり、女はとにかく私しかいない。こういうときアバヤというのは実にいい衣装である。顔と髪を出してはいるがすっぽりと足まで隠れるアバヤを着ていると男性の目を気にしないでいられる。アバヤは心まで守ってくれるものだと気づいた。

　小柄なＴさんは五つほどある申請の窓口のひとつに入り込んで顔馴染みらしい受付のサウジ人男性と話している。三〇分ほどして私が呼ばれ、その場で写真を撮るという。隣りの窓口との仕切りになっている手すりの上にカメラが付いていてそこを見ろと言う。

「えーえ、こんな衆人環視の中で」と文句を言う間もなく撮影は終了した。そしてあっという間に私のＩＤカードはできあがった。受付のサウジ人はさわやかな笑顔で「写真は気に入ったかい。撮りなおししようか」と言ってくれた。私は自分の小さな顔写真を流れるように一瞥してから笑顔で「ノーサンキュー」と言ってそそくさとその場を後にした。たとえどれほど醜い写真であってもふたたびあの場で撮影するなどゼッタイにしたくなかった。外に出るとＴさんが言った。

「いやあ、きょうはホントにラッキーでした。こんなにすんなり行くのはめずらしいんです。日付が短いのでまたすぐに更新に来ないといけないですが、とにかく早かったです」

「写真の撮りなおしなんかしないでよかったですね」

「え、ええ、そうなんですよ。やつら突然気が変わったりするから、カードが発行されたらとっとと出てくるのがいちばんです」

すでにひとりの日本人女性社員が下準備のために当地を訪れていたものの、私がはじめてラービグ・コミュニティに住みついた日本人女性なのだった。

2006.12.18

１３　国際都市ジッダ

今年の冬、日本は暖かいそうですね。先日、母と電話で話したら、雨も多いと言っていました。「雨が多い」とはなんとも羨ましいかぎりです。

こちらは一〇月の終わりに体験した豪雨以来、雨はほとんど降らない。その後一月に一回、少しだけ降った。日本でいうお天気雨のようで、陽射しを浴びながら降ってくる雨は強烈な太陽に勝つすべもなくたちまち退散してしまった。
そしてこの時期特有なのかときおり強風が吹きまくる。砂嵐がひどいときは空一面が砂色（淡いクリーム色）にかすみ、そんな日は外出もままならない。砂嵐の日には、サッシの窓枠からパウダーのような細かな砂が家の中に侵入してきて、室内が砂だらけになってしまう。風向きによって移動はするものの、あちこちの窓辺周辺に砂パウダーの溜まり場ができる。風が止んでから外に出てみるとテラスの隅々にきれいな砂溜まりができている。砂はあまりにもきれいで拾い集めて化粧パウダーにしたいほどだ。

ＢＢＣワールドなどでは毎日「世界の気象情報」の番組が放送される。サウジで登場するのは首都リヤドと紅海沿岸の大都市ジッダだけ。気象番組によるとこの時期（一月ごろ）ジッダではときおり雨が降っている様子なのに隣町であるここラービグまで雨がやってこないのはなぜなんだろうといつも不思議に思っていた。そうしたら、この「隣町」というのがクセモノだった。
「一五〇キロも先の隣町なの？」と以前、息子に話して大笑いされたことがあった。いくらなんでも遠すぎる。たしかにそうだ。たとえば東京から一五〇キロというと、西は静岡あたり、北は日光あたり、南へ行くと伊豆七島って感じだ。一五〇キロ先はどう転んでも同じ気象圏内にはない。

ところで、その一五〇キロ先のジッダにはよく買物をしに出かける。よくといっても、週一回か二週に一回ぐらいのペース。なんせ、いま住んでいるコミュニティ内のスーパーでは欲しいものが手に入らないので遠い「隣町」へとのこのこ買出しに出かけるのである。片道一時間半から二時間のコース。最近はもう慣れたのでそれほど疲れないが、最初のころは帰宅するともうくたくただった。

砂嵐の日。前方に広がるジッダの街はクリーム色にかすんでいる。

日本ではあまり馴染みのない都市ジッダだが、サウジ第二の大都市であり、古くから貿易港として栄え、さまざまな民族が行き交ってきた歴史を感じさせる町である。コバルト色に輝く紅海の沿岸には、リゾート地として整備されたビーチを望むデラックスな高層ホテルが建ち並び、高級住宅街を形成しているかと思えば、一方、まるでアラビアンナイトに出てきそうなどことなく傾いでいるような華奢で古めかしい五、六階建ての建物群が狭い通路沿いに林立しているような地域も残っている。

道路はよく整備されていて、どこもたいへん広々している（国土が広いから当然だね）。ジッ

ダの町を南北に縦断するマディーナ・ストリートでは信号に出会うことがない。主要な道路とはほとんどが立体交差でつながっているからだ。幹線道路沿いに見かける建物は高くてもせいぜい七階建てぐらい。巨大な高層建築はまだあまり見かけない。また自動車の部品屋街、服の仕立屋街、電気街などのように業種ごとに棲み分けた町並みを見ることがある。町に歴史があることを感じる。民族ごとに棲み分けている地域があるのかどうかはわからない。たとえば中国人街とか、インド人街とかがあるのかもしれないがいまはまだ見つけることができない。

建物は古いものが多いが、新旧が混在しており、全体的な印象はデコラティブである。どういうことかというと建物のどこかに必ずアクセントになる部分がある。それは格子窓のアラベスク模様だったり、アーチ形の窓ガラスだったり、彫刻だったり、黄金色のアラビア文字だったりと人目を引くデザインが多いからだ。まあ、日本の侘び寂びの対極の雰囲気を想像してください。この国では何ごとも大きくてきらびやかなものが尊ばれるのだ。しかし町全体のイメージは砂漠色。砂をかぶっているわけではなく、建築物の外壁がたいてい砂漠色でできているから。それともうひとつ街に緑が少なく砂地の空地が目立つこともあるからだろうか。

でもこの砂漠色（このあたりは黄土色）はとても理にかなっている気がする。先に書いたが、砂嵐が起こるとどこもかしこも砂だらけになるし、建築材料に手近な素材を利用するのは賢い方法だと思う（実際に手近な材料を使ってるかどうかは不明だが）。

私がよく買出しに行く場所は巨大な駐車スペースを持つアメリカンスタイルのショッピングモール。大きなスーパーマーケットがたいていは併設されている。女性用の服を売る店がやたらに多いが子供服店が多いのも子どもが多いサウジらしい。宝石店、髪飾りなどのアクセサリー店、インテリア小物・雑貨店、携帯ショップなどが並ぶ。エキゾチックなサウジらしさは香水店だ。まず目につくのは店内にたくさん並んだ美しいカットガラスの瓶の数々である。香水は好みの香りを調合してつくってもらう。ヨーロッパの高級ブランド香水に慣れている人には野生的で強烈な香りに感じられるかもしれない。どこのモールに行っても香水店は必ずある。

またファストフード店やカフェもお馴染みの店が出ている。スターバックス、マクドナルドは必ずある。コスタコーヒーというスペインのカフェもときどき見かける。アイスクリーム屋さん、ドーナツ屋さん、チョコレート屋さん、日本でなじみのない店も多いが、たいていは欧米系のフランチャイズ店である。商品の内容、値段、包装、店舗の作りなどはほぼ世界共通のようだが

、地域性、民族性の違いは売っている人間が示している場合が多い。

　ジッダの港近くのフィッシュ・スーク（魚市場）にも行った。イカ、えびが豊富。アジ、さば、鯛なども売っている。先日は、かつお、カレイなどもゲットした。生タコを買ったこともあるが、これは家に帰ってから下ごしらえがとてもたいへんなので二度と買いたくない（でもまたタコを見たらきっと買ってしまうんだろうな）。小さなサメも売ってる。沖縄でイラブチーとかイラブチャーと呼ばれる青い鯛も売ってる。みんなじつに大きめである。陸の上の動物は比較的小型なのに海の生き物はなぜか大きい。早朝の水揚げ後に行くと新鮮な魚がたくさん並ぶ。めずらしさもあり焼いたり煮たり揚げたりして久しぶりに魚を堪能することはできた。本当は刺身で食べられるとよかったけれど、ここでは刺身を食べる発想がないから、どれほど新鮮だよと言われても遠慮せざるをえない。

　魚市場でおもしろいと思ったのは、市場の横に釣り具屋さんが軒を連ねていることだ。 魚市場に来る人なら魚釣りに興味があるだろう〉と考えたかどうかわからないが、いかにもそんな酔狂な客人を待っているのんびりした店構えである。東京築地の場内市場に釣り具屋さんはなかったと思う。築地にかぎらず日本でも外国でも魚市場に併設された釣り具屋さんなど見たことがない。たとえば魚市場でダイビング用品を売っていたり、ヨットやクルーザーを売る店があったら違和感を感じつつも、どちらも海でつながっているそのつながり方にちょっと新鮮さを感じないでもない。それもジッダという町のおもしろい「都市カルチャー」のひとつだと思う。

　さて、イスラム教徒は一日に五回のお祈りの時間を持っている。日の出や日の入りに影響されるお祈りの時間はいつも少しずつ変わる。ショッピングや食事がこのお祈りの時間にさしかかることがよくあって、お祈りの時間になるとほとんどすべての店がガラガラとシャッターを閉め始めるのだ。入店はできなくなる。たとえば自分がスーパーの中にいる場合は買物を続けることはできるが、レジは無人となる。レジが開くまで買物し続けないといけないのだ。食事も同じで、食事をし続けることはできるが、明かりが消されて暗がりで食べることになる。こちらもお祈りの時間が終わるまで会計をしてもらえないので、食事が終わっていても座り続けなければいけない。

お祈りの時間はたいてい三〇分くらいかかる。イスラム教徒であってもなくても店は閉めねばならない。法律で決められているのだ。でもシャッターを半分ほど開けて明かりを消して営業している不届き者も中にはいる。
このお祈りの時間中、モールのトイレに行ったことがある（もちろん女性用）。トイレの入口付近の通路（ここはきれいな場所）にお祈り用ラグを敷いて、立ったり座ったり、ひざまずいたり、お尻を高く上げて頭を床につけたり、敬虔なる女性たちが一心にお祈りしていた。でも買物をしていたり、食事をしていたりするイスラム教徒らしき人もたくさん見かける。たまたまお祈りの時間にできないときはあとでお祈りすればいいらしい。

ジッダのもうひとつの顔は、ある王様の名前を冠したジッダ国際空港である。イスラム教の聖地マッカに向かう人びとが降り立つのはこのジッダ国際空港。空港近くには巡礼者を収容する広大な施設があり、そこからメッカに向かうバスが出ている。聖地巡礼を果たすために世界中から人びとがこのジッダ空港に降り立ち、旅立っていく。
しかし空港の建物は古くてくたびれた印象だ。階段やエスカレーターはなくどこまでも同じフロアである。客のほとんどいない免税品コーナーではアラビアンの雰囲気の香水などが埃をかぶってならんでいる。そしてお祈り用ラグ、クルアーンの章句をデザインした壁掛けやら置物、キャリーバッグ（荷物が増えてしまった旅行者用か）など、売られている物はどれも粗悪な安物が多い。有名な朗誦家のクルアーンＣＤやカセットテープなどが並んでいるのはいかにもジッダ空港らしい。

飛行機に搭乗するときはかならず全員がバスで飛行機のそばまで行き、そこで横付けされた階段を登っていくのだ。降りるときも全く同じ。空港が古いからなのか敷地が広いからなのか、昔なつかしい飛行場風景である。
ときおりベンツやＢＭＷで飛行機に横付けしたりする人がいる。〈ん？〉と思って見ているとトーブ（サウジ衣装）の男性がさわやかな笑顔を残してあっという間に高級車の車中の人となって飛行場のかなたに消えて行ったりする。
「あれっていったい何なの？」
「たぶん王族なんだよ」
「ハハーン、あの三万人もいるという王族か」
真偽のほどはわからない。こうした特別扱いがあるかと思えば、ファーストクラスやビジネスクラス客がほとんどその優位性を無視されてしまうのがジッダ空港である。会社の費用で飛行機に乗る日本人はおそらくビジネスクラス客である。搭乗の際や飛行機を降りるとき通常は先に動けるものだ。荷物引渡所のベルトコンベアに出てくる荷物も優先的に取扱われるものだ。だがジッダ空港では違う。「プライオリティ」と書かれたタグを付けた荷物が最後にやっと出てきたこともある。若いサウジ人の空港職員に文句を言っても無駄である。文句を言うと逆に公務執行妨害罪（そんなものがあるのかどうか）で逮捕されかねない。

飛行機の中では巡礼に行く人を見かけたことが何度かある。巡礼に行くのは巡礼月とはかぎらない。白いバスタオルを二枚だけ身にまとい素足にサンダルのいでたちの男性がいれば、それは巡礼者である。巡礼に向かう人はなぜかとても楽しそうな高揚した雰囲気を感じさせる。はしゃいでいると言ってもいいほどだ。一生に一度、聖地に巡礼することはイスラム教徒の義務とされている。それを果たせることの喜びをきっと噛みしめているのだと思う。

サウジアラビアはベドウィン出身の国とこれまで私は思っていたが、ジッダ、マッカ、マディーナなどを擁するアラビア半島西岸地域すなわち紅海沿岸地域は、交易や漁業などに従事する人びとが暮らし栄えてきた古い歴史ある地域だということをこの国に来て初めて知った。

2007.2.8

【引用コラム】
「・・・サウジアラビアの気候は、一般に高温乾燥砂漠性気候であるが、国土が広大で地理条件も様々であるため、地域によって大きな差があります。ジッダは海洋に面しているため年間を通じて高温多湿です。統計を見ると、各月の最高気温の平均は１年間を通じてほぼ３０℃を超え、夏場の最高気温はゆうに４０℃を超え暑さが耐え難い事もあります。更に濃い水蒸気が海岸を覆っているため湿度が高くなり、１年を通じて各月の最高湿度は９５％前後にもなります。例年降雨は１０月～３月にかけてわずかに降る程度で、ほとんどの場合、集中豪雨のため短時間で止みます。ジッダの降雨量は、年により差異はありますが、大体３０～４０㎜とサウジアラビアの都市で最も少く年間の降雨日数は例年一週間前後です。
ジッダやその周辺地域は古代より近接のエジプト、メソポタミアなどの文化圏への通商路にあたり、頻繁な隊商の往来により外部世界との交流が活発で、特にイスラームの勃興以後は、毎年世界各地から聖地マッカ、マディーナへの巡礼が多数来訪し、更なる活況を呈してきました。その様な歴史背景から、この地域の住民は概して国際性に富み、特に商業分野での活躍は顕著で、盛時にはマッカ商人、ジッダ商人の名は遠く東南アジアや西アフリカ地

域にまで知れ渡りました。これらの点は住民の多くが遊牧民出身で閉鎖的な人が多い内陸部、首都周辺のナジュド地方とよく比較されます。

　現在でも、この国際的な雰囲気は失われることは無く、近年のオイルマネー流入の好景気により、世界各国から集まる人々、林立する大型ショッピングモールや美しい珊瑚礁が広がるビーチで休暇を過ごすため国中から集まるサウジ人により、サウジ第２の人口を抱える商業都市としてジッダは益々盛況を極めています」

（「ジッダ案内」『在ジッダ日本国総領事館ホームページ』）

１４　デザートキャンプ

　ここ数日、朝晩は涼しくしのぎやすいです。こちらの人の話ではいつもの三月はもっと暑いそうです。といっても昼間の太陽はすばらしく強烈で、じりじりと肌に焼きついてきます。日本は三月になっても寒いぐらいの陽気だそうですね。

　サウジ人は、よく砂漠でキャンプをする。週末や長期休暇を利用して、砂漠にテントを張り、家族や親戚などが集まって寝泊まりするのだ。夜には満天の星を仰ぎ見ながら、皆で楽しく語らったりするのだろうか。お茶などを酌み交わしたり、甘ったるい香りの水タバコを吸ったりするのかもしれない。ベドウィンだった先祖の生活を忘れないようにという思いがあるそうだ。
　三月中旬のある休日（休日は木金）、サウジ人男性アリーが、私たち夫婦を海辺のテントに招いてくれた。到着したのは午前一〇時過ぎで、招かれたのは朝食だった。
　見渡すかぎりの茫漠とした砂漠と青い海が入りこんだ地域。地平線と水平線がみごとにひとつになって青く細いラインがどこまでも続いて見える道なき道を車はひた走り、やがて眼前に風をはらんだ二つのテントと大きな４ＷＤ車が見えてきた。そこは私たちが住むコミュニティの北へ約五、六キロの美しい海辺だった。

　まずは無人のテントに通されて敷物の上に座っていると、にぎやかな子どもたちがあいさつにやって来た。いちばん年長の美しい少女は日本のアニメの大ファンとのことで、日本からの客人を大歓迎してくれた。
　やがて食事の準備が整ったのか、大きなテントのほうへと案内され、私たちを招いてくれたアリーの両親、そして彼の姉とその夫とを紹介された。サウジに来て初めてサウジ人女性と交わしたあいさつだった。驚いたことに、二人の女性はアバヤをまとい、頭にはヒジャーブ（スカーフ）を被っていたものの顔は見せていた。ふつうサウジ人女性は家族以外の男性には決して顔を見せないで隠している。食事のときも男性は男性同士、女性は女性同士に分かれて同席しないのがふつうだと聞いている（サウジ人女性はたいへん閉鎖的）。だからこれは私たちが大いに歓迎されている証しであり、うれしく思った。ところで件の子どもたち四人はその姉夫婦の子どもたちだったのだ。他にメイドとおぼしきインドネシア人の若い女性が二人いたが、紹介されなかった。アリーは現在ラービグに単身赴任中といったところで、妻と子どもはそこにいなかった。
　女性たちが食事の準備を整え、それぞれの座にすわった。

サウジでははじめにかならずアラビックコーヒーが客に供される。それは強烈なカルダモンの香りが漂う。カップに注がれたその色はかすかな緑色を帯びた茶色で、濁った日本茶という感じだ。軽く煎ったコーヒー豆を荒く挽き、そこにジンジャーやらカルダモンやらの各家庭独特の香辛料を配合して弱火でじっくり煮出すコーヒーである。このカルダモンという香りはサウジアラビアの魂の香りといっていいだろう。人びとの生活の中にこの匂いは染みついている。どこに行ってもこの香りが漂っている。テントの中ももちろん枯草のようなこのカルダモンの香りに包まれている。

アラビックコーヒーは取っ手のついていないお猪口ほどの小さなカップで供される。求めれば何杯でも注いでくれる。求めなくても何回も勧めてくれる。

そしてコーヒーの後、チーズ、パン、牛乳、ヨーグルトなどが配られた。

「絞りたてのゴートミルクを試してみますか」
　アリーはプラスチック容器の底のほうに少しだけ入った山羊乳を掲げて見せてくれた。牛乳嫌いの夫はその場から一刻も早く退散したかったに違いない。だからというわけでもないが、お腹の強さに自信がある私が山羊乳に挑戦することになった。乳は生ぬるくて草の香りがするようだった。うまいとも言えず、ましてやまずいとも言えなかった。

「そういえば、噂に聞くキャメルミルク（ラクダのミルク）はないのかしら」
「ダメだよ、キャメルミルクが欲しいなんて言っちゃ」
　二人でこっそりニヤニヤ交わした日本語の会話。キャメルミルクは男性の強精剤だと言われている。

　食事のあいだ、あの美しい少女ハニーンは笑顔を絶やすことなくずっと私のとなりにすわっていた。たどたどしい英語を尽くして日本のアニメの話をしてくれたが、私が知っていたのは「ガンダム」だけ。日本のアニメがたくさん輸入され、アラビア語で放送されているようだ。「日本へ行きたい。着物がほしい」と、アニメを通して知った日本への憧れを目を輝かせながら語ってくれた。まるで少女マンガに出てくる大きな瞳の女の子そのもののように。
　この国で出会う子どもたちの瞳はほんとうに美しい。瞳の中には好奇心や希望や恥じらいやとまどいなどがいっぱい詰まっているからきらきらと輝いて見えるのだ。無関心や侮蔑や尊大さが詰まった瞳には光も輝きも見えはしない。すれ違うとき「サラーム」とあいさつすると、ほとんどの子どもは右手を上げてあいさつを返してくれる。恥ずかしそうにはにかんだ笑顔も満面の笑みもどれも輝くように美しく見える。

　さて、アリーとハニーン以外は英語を話さないのか、他の人たちと会話を楽しむことはできなかったが、楽しい雰囲気だけはじゅうぶんに伝わってきた。アリーのお姉さんはなぜか他のだれよりも色が黒くて、明るく気さくな女性だった。お母さんは眼鏡ごしに優しいまなざしを向けてくれた。元学校の先生だというお父さんは終始静かに威厳を漂わせていた。声も身体も大きいお姉さんの夫は寝そべってアラビア語でしきりに何かを話していた。アリーは夫の横にすわって、家族の話などをいろいろと語ってくれた。
　アリー曰く「朝食はごくシンプル。昼食が一番豪華な食事」なのだそうだ。彼はほんとうは私

たちを昼食に招きたかったのだが、昼食の時間は午後三時と聞いた私たちが断わったのだ。そしてぜひまた遊びに来いと何度も何度も誘ってくれた。

　心地よい海風がテントのすきまを吹き抜けていく静かな時間の中で、私はアリーが語ってくれた言葉を何度も反芻した。
「魚釣り？　もちろんできるさ。海の中で捕るんだよ。大きな魚が捕れるよ。海の中をずうっと遠くまで、あの濃いブルーに変わるところまで歩いて行けるのさ。…」

2007.3.25

１５　ハラールとハラーム

五月のサウジは三八度

　ゴールデンウィークはいかがお過ごしでしたか。ＧＷ中のある日、ＮＨＫのニュースを見ていたら「きょう日中は二五度の汗ばむ陽気で…」と伝えていました。いまこちらの日中の気温は三八度。歩いていると身体中に太陽がつき刺さってきます。暑いというより痛いです。

　「この国（サウジ）に生まれたということは神から過酷な運命を与えられたということだ」と映画『アラビアのロレンス』の中で首長アリが言っている。時代が変わり、今ではエアコンの効いた家、惜しみなく使える一リットル約一五円のガソリン、豊富な飲み水、そして店にあふれるモノ。今どきのサウジ人はむしろ神より選ばれし民族と自負してるはずだ。

アラビア人の友だちローナ

　私にアラビア人の友だちができた。ローナという名のレバノン人。年齢は三〇代の前半だが、五人の子持ちである。私たちはお互いの国の食べ物の話をよくする。彼女がある時、私に質問した。
「あなたはどうやってニワトリを殺すの？」
「はあ？」
　私は聞き返した。もう一度言って。
「だから、あなたはどうやってニワトリを殺すの？」
　怪訝そうな顔の私を見て、彼女は自分の喉に人差し指をあてたり両手を絞るようなジェスチャーをしながら、またおなじ質問をくりかえした。
しかし困っちゃうなあ、そんな質問されても…。だってニワトリなんて殺したことないし…

　ちょっと待て、と自分に言い聞かせ、他人から聞いたことがある話をすることにした。
「ンーン、エー、たぶん」
　私は両手で首を捻るような動作をしてみせた。
「やっぱりそうでしょオ。そうだと思った」
　彼女は美しい瞳をクリクリさせて納得している。そうだと思ってもらっても困るのだ。
「私は殺したことはありませんよオ。でも日本ではたいていそうやって殺すと思うんだけど」
アッ、昔、生物クラブでニワトリの解剖したことあったっけ、ハハハ…

「うん、わかるわ。でもね、私たち（アラブ人）はちがうの」
と言いながら、彼女の右手は首をはねて逆さ吊りしたニワトリを持っているしぐさだ。
「こうやって血を抜かないといけない。生き物はみんなこうやって殺されるの。牛も羊もまず首をカットして血を抜く…」
「羊はね、ずらっと並んでオートマチックで喉元をコンコンコンとカットされるのよ」
　オートマチックの屠殺場のようなものがあるらしい。ああ、それがどうやらイスラムの儀式に則った殺しかたなのか、と私は納得した。

　サウジ人（だけではないようだ）は、祝い事や客人をもてなす時には今でも羊を一頭買ってきて、自宅でさばいて料理するのだそうだ。そこで大事なことは、祈りながら殺すこととすぐに血を抜くことだ。それをしない肉は食べてはいけないのだ。イスラムの儀式に則って処理された鳥獣肉を「ハラール」と言い、スーパーなどの店頭では「ハラール」シールが貼ってある肉が売られている。「ハラール」の反対は「ハラーム」。イスラムの儀式どおりに処理されない肉およびその肉を食すことも「ハラーム」である。豚肉や死肉を食べること、酒を飲むことなども「ハラーム」である。「ハラール」とは許されたもの、合法的なものという意であり、「ハラーム」はタブー、禁じられたものの意である。

日本製の食料はハラームがいっぱい

　ローナのご主人は、ちょうど桜が満開のころ仕事で日本に滞在していた。そして日本からたくさんのおみやげを持って帰って来た。ある時、ローナが数種類の日本製のさまざまなレトルトパックを私に見せて、箱に書いてあることを訳せと言った。私は電子辞書片手に説明を試みた。
「ＢＵＴＡは？　ＢＵＴＡ？」
「ポークのことか？」と聞き返しても彼女はポークという単語を知らないのか、笑いながらＢＵＴＡを連発するのだ。豚は入ってないかと聞いているのだが、さて私は困ってしまった。
　日本製のソースやスープなどにはたいてい「原材料の一部に豚肉、鶏肉、牛肉、大豆、乳製品を含む」といった表記が見られるのだ。これらはアレルギーの原因物質として記載が義務づけられているモノたちなのだ。たぶんささやかな豚肉のエキスが含まれているだけなのだ。シチュー

のルーにはアルコール入りのものもあった。正直に伝えるべきかどうか、しばし悩み、やはり書いてあるとおりに伝えた、イスラム教徒の尊厳のために。
　彼女の顔が少し曇った。せっかくたくさんご主人が買ってきてくれたのに、ちょっとかわいそう…。
「どうするの？」
「今晩、主人に聞いてみる。彼がオーケーと言えば食べるけど、ノーだったら食べない」
　さあ、結果はどのようになったと思いますか（答えはあとでネ）。

サウジ料理とは

　サウジの代表的な料理はカブサと言う。ピラフのような炊き込みごはん（長粒米）の上にローストした肉をのせて供される。正式には丸ごと焼いた羊が頭付きで出てくるそうだが、私はカット肉のカブサしかお目にかかったことがない（実に残念）。カブサは大きなステンレス製の皿に盛られて出てくる。肉をちぎるのもごはんをとるのも手づかみで、手は羊肉の油でギトギトになるが、なかなかの美味である。初めてローナの家を訪れたとき彼女はお手製のカブサを山のように作ってご馳走してくれた。

　私はローナの家にときどき遊びに行き、よく昼食をごちそうになる。彼女はとても料理が上手い。かつ料理する手がじつに早い。あるとき三本のにんじんの千切りを私が頼まれた。私は渡された千切り器がコワいのでゆっくりとおろしていた。すると「もっと早くやらないと日が暮れちゃう」と美しい笑顔を添えながらも一喝されちゃったのだ。彼女はにんじんを持つとすごい力と速度であっという間に千切りにんじんを完成させてしまった。彼女のにんじんは櫛のようにくっついていたり太さも長さもおそろしく不揃いだったのに、できあがった料理の中ではきれいな千切りにんじんとなっていた。あっぱれな料理人と感嘆せずにはいられない。
　また彼女は日本人が使うような大振りの包丁とまな板というものを使わない。切れ味のあまりよくない小さなナイフひとつ宙にかざして器用に切ったり刻んだりする。

　レバノン料理はアラブ料理の中でいちばんおいしいと言われている。彼女もそれをしっかり自負しているようだ。子どもたちと私たち女性だけの昼食はかざらないふだんの食べ物だが、彼女が作ってくれる料理はいつも野菜がたっぷり入っていて香りもよくおいしい。そしてヨーグルトをいっしょに（ソース代りに）食べるのがローナ風である。たとえば、ナスやズッキーニの中身をくりぬいて、肉、ハーブ、野菜などのみじん切りを詰めて煮込んだ料理を食べるときにプレーンヨーグルトをソース代りにかけて食べたりするのだ。

　またローナにかぎらずアラブ人は「ホンモス」というソース代りのペーストが大好きだ。これもよく食卓に出てくる。ホンモスはヒヨコ豆とゴマのペーストにオリーヴオイルがかかったもので、もっともポピュラーなペーストである。ドレッシングかマヨネーズあるいは日本人にとっての醤油のごときものだ。パンにのせたりサラダに付けたりして食べる。
　アラブのパンは「ホブズ」あるいはフブズと言って、発酵させずに焼いたピザクラストのようなもの。食事にライスがあってもホブズはかならず食べる。サラダで有名なものは「タブーレ」といい、イタリアンパセリ、ミント、トマトなどを細かに刻んでレモンとオリーヴオイルで食べるものだ。あとは餃子や春巻の皮のようなものに香辛料を効かせた肉やチーズなどを詰めて油で揚げる料理もある。パイか点心のような料理で、しっとり感やジューシーさに欠けるもののなぜか古めかしい味わいがある。

　彼女の料理のいずれがレバノン料理かサウジ料理か。彼女は自分の料理はみなレバノン料理だと言う。サウジをちょっぴり見くだして「もともとサウジ料理なんてものはない」と言う。というわけで私が知っているサウジ料理はいまもなおカブサ（あるいはカプサ）しかない。

　さてさて、「超微量豚肉エキス等入り食品」に対して敬虔なるイスラム教徒はどのような判断を下したと思いますか。
　答えはやはりノーだった。私はとても悪いことをしたような気持ちだったが、彼女が私に言ってくれた。
「いいえ、言ってくれてほんとうにありがとう。あなたはとても正しいことをした」

2007.5.12

１６　タブーの魅力

「サウジでは外国人もお酒を飲めないの？」との質問をよく受ける。答えはもちろんノーだ。なのに、店ではワイングラス、デカンタ、ワインクーラーなどがふつうに売られている。何か腑に落ちないものを感じる。

あなたは醤油にも少しだけアルコールが入っていることをご存知だろうか。
サウジでも世界ブランド・キッコーマン醤油は手に入るが、ノンアルコールなのである。お菓子作りに欠かせないバニラエッセンス（これもアルコール）はなくて、代りにバニラパウダーが売られている。このほかにも、慣れると酔えるドイツ製ノンアルコールビール。なぜかワインを思わせる瓶に入れられていて〈もしやワインかな〉と一瞬期待すれど期待はずれのノンアルコールフルーツシロップ。と、この国ではマア万事がそのようにノンアルコールに徹している。当然お酒そのものなど売っていない。
でも味醂も禁止っていうのはホントに困ったことである（どうやって料理すりゃいいんだ？とか言いながら下手な料理の腕前をかくすのにはぴったり。これぞかくし味、なんちゃって）。ちなみに alcohol はアラビア語由来の言葉。頭にアルがついている言葉はアラビア語出身が多い。

なんとか運よく外国からお酒を持ち込もうなんてゆめゆめ思ってはいけない。サウジ入国時の荷物検査はいたって簡単なものだが、麻薬、ポルノ、アルコールの摘発に当局は厳しく臨んでいる。アルコールの場合、発見されたらそこにはコワーい公開鞭打ち刑が待っている。
映画ＤＶＤやグラビア雑誌などを持っていることが暗視カメラのモニターに捉えられると逮捕はされなくとも厄介なことになる。ポルノやヌード写真がチェックされるのだ。ポルノとは無関係であってもＤＶＤや雑誌などは取り上げられるか、別室で中身をすべてチェックされて、場合によっては黒く塗りつぶされてから数時間後に解放されるそうだ。最近ではノートパソコンを持っていて同じような目に遭ったという話も聞いた。ヌード写真やポルノ映像などが保存されていないかをチェックされるという。噂によるとジッダよりリヤドの税関は数倍厳しいらしいが、のんびりしたジッダ空港の係官も忠実に職務は果たしている。禁制品を持ち込もうなどと思ってはいけない。

アルコールに話を戻そう。日本人商社マンが逮捕されたとか、アルコール付きパーティが摘発されたとかの噂も伝わってくる。酒飲みのわが夫婦にとってここは地獄だが、外国人はみなそれぞれ創意工夫をしていると風の便りが伝えてくる。また蛇の道を嗅ぎつけて密輸ルートを持っている人もいるそうで、なんとも羨ましいかぎりだ。なんたって、いくつかの航空会社はサウジの空港を離陸するやいなやワインやビールを乗客に出してくれる。ということは、飛行機がお酒を持ち込んでいるということである。ちなみに大使館や領事館などは言わずと知れた治外法権。大使館や領事館の中ではお酒が飲めるのだ。

スコッチウィスキーの最大の輸出国はじつはサウジだという噂もある。ジョニ黒の闇ルート価格一本一万八千円から三万円（！）というウワサだから、世界でいちばん高い流通価格といえる。酒とか麻薬などの密輸にたずさわるのは貧しいバングラデシュ人やパキスタン人が多いと言われる。うまくいけば大金を稼いで本国に戻って大金持ちになれるけれど一歩間違えば死刑だ。自分用に持ち込んで捕まる場合は、鞭打ち刑あるいはうまくかわして罰金刑ぐらいで済むと聞く。

しかしビジネスで酒を持ち込むのは極刑になるらしい。お酒を飲まない人にとってはどうということもないだろうが、たかが酒されど酒、ないと思うとよけいに恋しい。まあ、それを覚悟でここにきたわけで文句も言えない。

　サウジ以外のたいていのイスラム諸国では、少なくとも外国人はお酒を飲める。たとえばドバイ（アラブ首長国連邦のひとつ）では、空港でお酒を買うことができるし、ホテルやレストランでもふつうにお酒を飲める。ただしそこに住んでいる外国人がお酒を購入するには、リカーパミット（一ヵ月の購入額の決められた許可証）を発給してもらい、それに基づいて買うそうだ。
　ドバイは現在、金曜日と土曜日が週末にあたるが、木曜日（あるいは水曜日）の夕方あたりからドバイの交通渋滞は絶頂にさしかかる。それというのもアブダビ（アラブ首長国連邦の首都で禁酒の都市）から車に乗った人びとが大挙おしよせて来るからだ。目的は酒だ。その人たちは、イスラム教徒なのかそれとも異教徒なのか。
　サウジ人（男性）といっしょに旅行した日本人から聞いた話だが、お酒を飲める国であってもいっさいお酒を飲まない人がたしかに多いが、中にはちゃっかり飲む人もいるらしい（サウジ人は百パーセントイスラム教徒）。そんなこんなで、週末のドバイにはサウジ人もおおぜいうろうろしてるはず。

　話はちょっと変わるが、ラマダン（断食月）時、ドバイのような観光地はオンシーズンとなり、ホテルの宿泊代も高騰する。いったいなぜだかわかりますか。

　…ラマダン中のとある空港のラウンジでの光景…。五〇代ぐらいのりっぱな体格の夫妻と彼らの娘らしき痩身の三人の若い女性、娘の婿とおぼしき青年ひとり、ベビーカーに乗せられた女の子がひとり、南アジア人の若い娘がひとり。典型的なサウジの裕福な家族がテーブルを囲んで食事をしている。もちろん南アジア系のメイドはそこにいっしょにすわってはいないが。
「あら、お金持ちはラマダン中、ちゃっかり外国で暮らすこともありなのね」
「もしかしたら、あの三人のうちの一人は、娘じゃなくて第二夫人だったりして…」
　傍らで文庫本を開きながら、ときおりちらちらとその家族を眺めている私。異国では下世話な憶測もエキゾチックな夢物語になるなん。

2007.7.15

【引用コラム】
「ボート・ダイビングはほとんどしなかったけれど、あるとき、アメリカ大使館に勤めるアメリカ人女性と知り合いになったことで、ボート・ダイビングをしたことがあった。彼女は、ボートを持っていて沖合いでのダイビング・ツアーを申し出てくれたというあるサウジ人を紹介してくれた。そして彼女もツアーに参加するためにやってきた。そのボートは、無線トランシーバもライトも積んでいなかったが、そのためつまりはのんびりしたツアーだった。彼女の大胆な試みと私たちのツアーが適法であることを確認する沿岸警備隊との必要な手配はすべてなされていた。私たちは署名し、彼女は言った。約一五キロ沖合いのウィスキー・リーフに連れて行ってくれるはずよ、と。
　波立つ海面をリーフに向かって走り、海岸線が見えなくなった。そして錨が海に投げられた。私たちはダイビングのために「装備を固め」、ジャンプした。そのあたりの海の床は

、だいたい一〇メートルほどだった。そこでは、まるでシビレエイに触ったかのように興奮のための身震いがダイバーたちの身体を駈けぬけた。海底には、何百本もの本物の酒のボトルが眠っていた。ほとんどのボトルのラベルは洗い流されていたが、ボトルの形状と中身が入っていることを示す未開封の栓はちゃんとしていた。しかし、とても残念なことには、かつ前代未聞だが、大多数のボトルの中で珊瑚が育っていたのだ。水はその圧力で密閉栓の中をぐるっと回って入るだけの威力を発揮したのだ。ああ、ただ一本のボトルでもいいと願った。そして、それはジョニー・ウォーカーだった。まぎれもない琥珀色を湛え、そして珊瑚が入っていなかった。私たちはそれを持って、いやもっとたくさんのボトルを抱えて海面に出た。ボートの上でＪＷを一杯やろうという気持ちだったがしかし、強烈な酒の香りとともにそれらは消えてしまった。思いもよらぬことが起こってしまったのだ。そうだ、私たちはとてつもなく大きな軽率な過ちを犯してしまったのだ。深度一〇メートルの海水を上がってくるときジョニー・ウォーカーは栓から抜けたのだ。

　なぜそんなところに酒が沈んでいたのかは明らかだ。サウジに本物の酒を持ち込もうとする数多くの密輸の一つの結果にすぎない。きっと沿岸警備隊が密輸人たちに迫っていたのだろう、密輸品を捨てざるを得なかったのだ。どのボトルも役立たずだったが、私たちはできるだけたくさんのボトルを海から引き上げた。沿岸警備隊は未開栓のボトルについては報奨金を支払っていたのだ。彼らが仕事をちゃんとやっていたことは確かだ。上の役人たちに証明するよ」

John Paul Jones, 著者訳, OtherShores,OtherDiversions, "If Olaya Street Could Talk" 2007

１７　ちょっと前までベドウィンだった

　デザートキャンプに招待されたあとに私はなぜか遠い昔に同じような体験をしたことがあるような気がしていた。鮮明さと曖昧さと薄暗さとが混ざりあったデジャブの風景。砂漠、陽に焼けた黒い顔の人びと、テントの中の暗さ、色褪せた敷物の上にこぼれた砂粒。羊の丸焼き、ごはんを手づかみで食べている人びと、そしてさそり。実際は見ていないのにまるでほんとうに見たようになつかしい風景がそこにあった。〈テレビや映画で見たことがあるだけかもしれない〉〈でもどこかで見たことがある、この光景〉

　私はくる日もくる日も記憶を必死に追いかけた。するとほとんど忘れかけていたある本の記憶が蘇ってきたのにはおどろいた。それは、朝日新聞の記者だった本多勝一氏の『極限の民族』を読んだ記憶だったのである。アラスカのエスキモー・ニューギニア高地人・アラビアの遊牧民といった「極限」に住む人びとを人類学者のようにフィールド・ワークしたドキュメンタリーだ。読んだことがあるという方も多いはず。たぶん私が高校二年生の夏休みに読んだから、一九七〇年前後に出版されていると思う。あまりにも遠い過去のことであり、読んだことすらすっかり忘れ果てていたのに、思い出すと不思議なことにいつ読んだのかということまで思い出した。
　しかし現物を見ないことには確証が得られない。古い本だがネットで探すと容易に手に入ることがわかり、私は友人に頼んでサウジまで送ってもらうことにした。そして「アラビア遊牧民」(『極限の民族』第三部）のページをあらためて読んでみて、ああ、なるほどそれが私のデジャブの源だったのだと納得した。

　著者とカメラマンの二人が、一九六五年夏、サウジアラビア内陸部の砂漠でベドウィンのテント村に二〇日間あまり生活した記録であり、初版が出版されたのは一九六七年、今からおよそ四〇年前のことである。サウジという国、四〇年後の現在でも日本人にとっては充分に異国情調溢れる国のひとつであるから、当時の異国情調たるやいかなるものだっただろうか。いや極限の民族という範疇に括られていたのだから異国情調どころではなかったのかもしれない。
　短い期間であれベドウィンとともに生活し、はじめのころは彼らは慎み深い人たちとして登場するが最後には「略奪文化」の人たちと書かれているのもすごい。ベドウィンはもともとは信仰心もなく砂漠の海賊同様の荒くれ者として存在したという。隊商やオアシスの定住民を襲い、部族間の戦争を繰り返していた。過酷な自然の中に生きた彼らにとって「略奪」は悪ではなかった。ゆえに「アラビア付近が古くから大宗教の発生地だったことと、これは無縁ではない」（本多、同）と著者は断言する。なるほど納得できる考えである。

　当時のサウジは「人口の半分以上は誇り高き遊牧民だ」(同「あとがき」）とある。一九六〇年代のサウジの人口は「三百万と五百万の間」(同）であり、そのおよそ半数以上がまだ遊牧民として暮らしていたというのだ。
　また「近代建築がふえたとはいえ、一般庶民の家は泥土の家が多く、遠くない昔の泥土の城壁は、市内のところどころに一部が残されている」(同）と当時のリヤドの光景についても書かれている。本多氏がサウジに行ったころ、すでに国をあげて近代化の槌音が猛烈なテンポで打ち鳴らされていたはずだ。日本が明治以来百年かけて行ってきた近代化（欧米化）をサウジは実にその半分の時間で成し遂げた。一九三〇年、リヤド市の人口はわずか三万人であったが、二〇〇〇年には約四百万人となり、総人口の八六％が都市人口といわれるまでになった。農民や都市に住

む人びとを見くだしていたかつてのベドウィンたちの多くも足を洗って定住生活者となったのだ。

　ジャーナリストとして世界各国を訪れている著者が、町で行き交う顔を覆った女性たち、犯罪者の公開処刑、四〇度を越える猛烈な暑さ、そして生活をともにしたアラブ人の「がめつさ」などについておどろきやとまどいをユーモアと皮肉いっぱいに書いているのが面白い。
　高校生だった私にはそのユーモアも皮肉もまるでわからなかったが、今サウジに住んでそれを読むと細部までよく見えてじつに楽しい。しかし実際に私が現在進行形で出会うアラブ人（サウジ人）はみな親切で「いい人」である。ときにベドウィンが生きてきた歴史を彷彿とさせるような場面がないわけではないが、サウジアラビア王国が建国され、オイルマネーによる超速の近代化・都市化が進み、多くのサウジ人は今や平和を愛する心優しき隣人となったにちがいない。

2007.9.8

【引用コラム】
「私たちは、フセインに「招待する栄誉を与えてやった」のであった。礼をいうべきは、むしろフセインの方なのだ。この考えは、のちに生活のすべてと関連して私たちを驚かすことになる。
　私たちが食事を終っても、まだかなり羊肉のカスや飯が残っていたが、これはフセインの妻や子どもなど、身内による第二波の会食に供された。
　こうしてサバクの旅をしていると、遊牧民はよく羊をごちそうしてくれるから、かれらは肉をしょっちゅう食べているのかと思う。また家畜の大群を飼っているのだから、当然肉が豊富だろうと、一般には思われがちである。しかし、ベドウィンが肉を食う量は、おそらく日本の都会人より少ないだろう。フセインなど、アブヒダードのベドウィンの場合、一家族で年に殺す子羊の数は約三〇頭、月に二、三頭にすぎない。この場合、一頭すなわち一食にしかならないのだ。冷蔵庫なんかないので、殺したら直ちに食べてしまう必要がある。一家族で食べきれないときは、親しい者同士で招待し合う。かれらの主食は、むしろ乳または乳製品と、ナツメヤシの実であって、肉や最近多くなった米はごちそうの部類なのである」
（本多勝一「アラビア遊牧民」『極限の民族』朝日新聞社 １９６７）

サウジアラビア便り　第一部

http://p.booklog.jp/book/34509

著者 : bismil1019
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bismil1019/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/34509

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/34509

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.